

## 平成 29 年度 豊田市矢作川研究所シンポジウム記録

### 川の新たな恵みを創ろう ～川辺の「<sup>も</sup>守り」をつなげるために～

本稿は、下記のとおり開催した豊田市矢作川研究所シンポジウムの記録である。紙面の都合により発言の内容は本誌編集委員会の責任においてその主旨を損なわないよう配慮し簡略にした。また、報告に使用したスライドの一部及びパネルディスカッションのスライドの全てを割愛した。

平成 29 年度豊田市矢作川研究所シンポジウム記録

「川の新たな恵みを創ろう ～川辺の「<sup>も</sup>守り」をつなげるために～」

◆日時 平成 30 年 2 月 3 日 (土) 13 : 30 ~ 16 : 30

◆場所 JA あいち豊田ふれあいホール

◆報告 「豊田市の水辺愛護活動とめざす川辺の姿」

洲崎燈子・吉橋久美子 (豊田市矢作川研究所)

「有間<sup>あんま</sup>竹林愛護会の活動」

原田茂男 (有間竹林愛護会)

「矢作川を見たい! トヨタ自動車・トヨタグループ従業員による竹林伐採ボランティア活動」

田中建三 (トヨタ自動車(株)トヨタボランティアセンター)

◆講演 「放置竹林を地域のお宝へ 『環境と観光と地域作り』竹で遊ぼう・竹で暮らそう」

曾根原宗夫 (天竜舟下り(株))

◆意見交換 「川辺の『<sup>も</sup>守り』をつなげるために」

パネリスト / 曾根原宗夫 (天竜舟下り(株))

/ 原田茂男 (有間竹林愛護会)

/ 田中建三 (トヨタ自動車(株))

トヨタボランティアセンター)

/ 今井忠良 (石倉水辺公園愛護会)

進 行 / 洲崎燈子 (豊田市矢作川研究所)

/ 吉橋久美子 (豊田市矢作川研究所)

書 記 / 名畑恵 (NPO まちの縁側育くみ隊)

○司会（内田） これより、豊田市矢作川研究所シンポジウム「川の新たな恵みを創ろう～川辺の「守り」をつなげるために～」を始めます。本日司会を務めます矢作川研究所の内田朝子です。よろしく願いいたします。それでは最初に主催者を代表して、豊田市副市長 礒谷裕司より開会のご挨拶を申し上げます。

○礒谷 皆さん、こんにちは。本日はお休みのところ大勢の方にお集まり頂き、大変ありがとうございます。日頃は豊田市の河川行政、とりわけ矢作川の自然環境の保全に対しましては格別のご理解とご支援を賜っておりますこと、改めて御礼を申し上げます。ありがとうございます。

本日は国会のお忙しい中、八木先生にもお越し頂いています。ありがとうございます。それから、ご後援を頂いております国土交通省豊橋河川事務所様、愛知県豊田加茂建設事務所様、矢作川水系八漁協連絡協議会様、まことにありがとうございます。

今日のシンポジウムですが、川の保全をつなげるためにどうしようかというお話なのですけれど、昨日、国際連合地域開発センターと豊田市の共催で、能楽堂でSDGsのシンポジウムがございました。SDGsと言うと分かりにくいのですが、Sustainable Development Goalsということで、これからの持続可能な開発のための17の目標です。これは国際連合が設定したのですけれど、環境だけではなくて、交通とか経済、人の暮らし、人材育成などを含め、公平に暮らせる世の中をつくろうという目標です。

昨日は、ニュースキャスターをされていた国谷裕子さんという方にご講演頂いたのですが、SDGsの目標の自身についての説明で、「これは日本古来の考え方です」というお話がありました。その一つは「もったいない」ということ、もう一つは「お互いさま」ということ。これは物を大事にする、ある物を大切に使う、それから、お互いに協力して助け合って生活していくということです。その二つを聞いた時に、「ああ、もったいない、物を大事にする、お互いさま、みんなで協力して物事に当たるということはやはり万国共通の基本なんだな、全世界共通なんだな」ということを改めて再認識致しました。

昨日の発表は、連携するというテーマと、次世代の技術をどう生活に生かすかというテーマで行われました。我々が生活する中で、いろいろな利害関係者の方が見えるのですけれど、皆さんとどうやって連携・協力して、その関係を次世代に残していくかというお話だったので

すね。

今日お話を頂く河川環境につきましても、その一つなのですね。今日のテーマも、いろいろいっぱい関係者がお見えになる中で、どういった取組を連携してやっていって、どう次につなげていくのだと、そういうお話だということに思っています。大変大事な取組でございまして、今日お集まりの皆さん方の中にもお見えになりますが、豊田市では今、19の水辺愛護会の方々が河川の水辺環境の活動をして下さっています。豊田市の中心市街地では、矢作川森林塾さんがもう10年もスタジアム前で竹伐りを続けて、すばらしい景観をつくり、守って下さっています。それから、トヨタ自動車のボランティアの方々には、何百人という単位で竹伐りの活動を本当に一生懸命やって頂いて、今、久澄橋から下流を見て頂くともう竹が全然なくて、すごく見晴らしがいい状況になっているのですね。そのように皆さん方と連携・協力してやっていくことによって、河川環境がよくなっています。

ただ、竹を伐るだけではなくて、これからどうやって環境をうまく保全しながら活用していくかということが大事だと思っています。豊田市も2019年に豊田スタジアムでラグビーワールドカップの試合がございました。日本代表戦を含めまして4試合が予定されています。その時に海外からもたくさんの外国人の方がお見えになりますので、ぜひその方たちに豊田市の駅からスタジアムまで歩いて頂き、矢作川の景観を見て、矢作川の河川空間で楽しんで頂けるように、我々も今、豊橋河川事務所さんと一緒に水辺プロジェクトということで考えています。

今日、配布物の中にチラシを入れさせて頂きました。豊田市を舞台に「星めぐりの町」という映画をつくらせて頂きました。今、全国で公開中でございます。既にご覧になって頂いた方もお見えになると思いますけれども、豊田市は本当に自然豊かなところでございますので、いろいろなところを舞台にして撮って頂いています。この映画には、大いに豊田市の自然をアピールする、そして今の豊田市を残していく、皆さんに伝えるといった意味で価値があると思っています。内容も大変よく、見る人によっては賛否いろいろございますけれども、ほのぼのとした人情ドラマになっておりますので、ぜひご覧頂ければと思います。

また、話が戻りますけれども、河川空間の自然環境を保全する上で、皆さん方、いろいろご苦労がある中で、どうやって工夫し、楽しみながら次世代につなげていくかということで、天竜川のほうから曾根原さんに来て頂

いていて、後でご講演頂きますが、その内容も今後の活動のヒントにして頂いて、ぜひこういったすばらしい活動を継続して頂きますようにと思います。今日は忌憚のないご意見を賜り、我々も一緒になって考えてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。それではご来賓の方からご挨拶を賜りたいと思います。衆議院議員 八木哲也様、お願い致します。

○八木 改めまして、みなさん、こんにちは。ただいまご紹介賜りました衆議院議員の八木哲也でございます。ご指名でございますので一言ご挨拶申し上げたいと思います。

今日の矢作川研究所シンポジウムは、「川の新たな恵みを創ろう」ということであります。この資料をペラペラと見させて頂いたら、私も知らなくて恥ずかしい限りでありますけれども、今、19の水辺愛護会が、また、竹の関係でわくわく事業で取り組んでおられる人たちが、日頃の活動を通じて、「やはり矢作川、すばらしい財産だよ」ということでご活躍なさっていることに、改めて感謝申し上げたいと思っております。

そういう中であって今、副市長さんのほうから、昨日も持続可能な社会をどうするのだという会があったとのお話がありました。ここにもたくさんの方がお見えになりますけれども、やはり皆さんが今、培っていることをどのように次につなげていくのかということが一つの大きな課題ではないかと、このような思いがしているのです。

実は来週、11日の日曜日に、文部科学省の主催ではあります、東京大学でビオトープの発表会があります。その発表会で今年度の文部科学大臣賞に、五ヶ丘東小学校のビオトープの活動が表彰されます。それで子どもたちに、1年間の成果の発表をして頂くわけでございます。私もそれに馳せ参じたいと思っておりますが、そういう子どもたちが実は豊田市にはたくさんいるわけであります、その子たちにどうつなげていくのかということが大切なような気がしてなりません。ここにはいい年の皆さんがたくさんお集まりですが、やはり矢作川で、次の世代にどうやって伝えていくのか、そのつながりを皆さんで考えて頂ければありがたいなと思うのです。

矢作新報に「ぼんつ倶楽部」という阿部夏丸さんの短いコラムがあるんです。私はあれを読むのが実は大好きなんです。矢作新報で一番いいのはあそこだけではな

いかと思う。あと「時々刻々」は余りよくありません、私が書いていることもありますので。本当にあれを見ると、時々、何か目から鱗が落ちるような気がするんです。「あっ、やっぱりこうなんだよね」と。次の時代は子どもさんが担うわけでございますので、この大きな我々の先祖から頂いた財産をしっかり次に残すように、皆さんと知恵を出し合って、こういう会を通じながら考えていきたいと思ひます。

今日、成果のあることをお願い申し上げまして、ご挨拶にさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。おめでとうございます。

○司会 ありがとうございます。国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所所長 澤頭芳博様、お願い致します。

○澤頭 皆様、こんにちは。豊橋河川事務所の所長をしております澤頭と申します。本日、後援という形で参加させて頂いておりますが、このような形でシンポジウムが盛大に開催されますことに、まずはお喜び申し上げたいと思ひます。そして、感謝申し上げたいと思ひます。また、ご参加の皆様におかれましては、日頃から矢作川の河川整備に対しまして深いご理解とご協力を賜っていただきますことを、改めてこの場で御礼申し上げます。

本日主催されております豊田市矢作川研究所におかれましては、矢作川の豊かできれいな水の回復、また、人々の生活にうるおいとゆとりを与える川づくりをめざしておられるということで、平成6年に第三セクターで設立されて、先ほどお聞きしましたら、平成15年から市営ということで、四半世紀にわたって活動し、現場に即したテーマで継続的にいろいろなことをまとめて頂いているということです。こちらに対しても改めて、河川管理者と致しまして御礼を申し上げる次第でございます。

さて、本日は先ほどから紹介致しますように、パンフレットで配られていますが、「川の新たな恵みを創ろう～川辺の「守り」をつなげるために～」というテーマで、水辺の愛護に向けた活動の成果と課題をこの場で改めて共有して意見交換しようと、こういうことでございます。矢作川水系の国の直轄管理区間におきましても、河川管理者と連携、共同した河川管理というものを実施してきておりまして、直轄区間だけ見ましても、先ほど豊田市は19団体とおっしゃいましたけれども、河川協力団体が2団体、それから後ほどまた詳しくご説明申し上げますが、アダプト認定団体というのが7団体、それ

と河川愛護モニターというものに個人的に応募して頂いている方が5名おられ、いろいろな形で河川管理、河川愛護の指導に携わって頂いております。これについてもいろいろ日頃の努力に御礼申し上げるところですが、とりわけ豊田市域におきましては、今日もご出席されていると思います河川協力団体の矢作川森林塾の皆さん、それからアダプト団体の、後ほど発表されるということですが、トヨタボランティアセンターの田中さんを中心にした皆さん、アマノコンサルタント株式会社さんもアダプト団体に登録して頂いておまして、本当に模範的な、継続的、積極的な活動を河川管理者とともにやっ頂いているところでございます。

特に、本日発表されますトヨタボランティアセンターの田中様におかれましては、森林塾の総理事長の橋渡しをきっかけに、この2年間、大変なご尽力を頂いております。昨年度と本年度で延べ3,000人に及ぶトヨタ自動車の職員の方を現場に動員して頂きまして、その企画運営をしっかりと頂きました。先ほども少し紹介ありましたが、繁茂した竹林を伐採して頂いたということで、200人、300人規模で複数回、対応して頂きました。

この繁茂する竹林を伐採することによりまして、水辺が見えるようになって景観がよくなるということも当然あるわけですが、もっと重要だと私どもが考えているのは、河道掘削と相まってということもございませう。河積を増やす、支障となっているものを除去することで、洪水が来た時に水が流れやすくなります。洪水時の水位を軽減することで、治水の効果もしっかりあるということです。要は、河川環境の面と地域の安全・安心の面の両面でしっかり大きな成果を果たして頂いたかなと考えております。この場で改めて御礼申し上げるとともに、引き続きの活動も期待しているところでございます。

豊橋河川事務所におきましては、平成21年度に策定しました河川整備計画を基軸に、川づくり、地域づくりを所員一丸となってしっかりと進めてまいりたいと思っております。流域の皆さんと意見交換し、しっかりご意見を頂きながら進めてまいりたいと思っておりますので、引き続きのご支援・ご協力をお願いしたいと思います。

それでは、最後に、今日のシンポジウムが盛会で終わるように、しっかり有意義なシンポジウムになりますことをご祈念致しまして、甚だ簡単でございませうが、冒頭の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお祈りいたします。

○司会 ありがとうございます。

本来ならご来賓の皆様よりお言葉を頂きたいところでございますが、時間に限りがございます。まことに恐縮ではございますが、お名前のみご紹介申し上げます。

矢作川水系八漁協連絡協議会 新見克也様。

愛知県豊田加茂建設事務所河川整備課課長 中村公要様。

本日は、まことにありがとうございます。

なお、衆議院議員 古本伸一郎様、愛知県議会議員 樹神義和様より祝電を頂戴しております。どうもありがとうございました。

## ■報告

### 「豊田市の水辺愛護活動とめざす川辺の姿」

○司会 それでは、本日のプログラムに沿って始めさせていただきます。

まずは「豊田市の水辺愛護活動とめざす川辺の姿」と題しまして、矢作川研究所研究員 洲崎燈子、吉橋久美子より報告致します。

○洲崎 ご紹介頂きました洲崎です。今日の報告に先立ちまして、本日のシンポジウムの全体の流れをご紹介します。

豊田市内では、水辺愛護会の複数のグループが川辺の林、河畔林の保全活動を行い、景観や親水性の向上に大きな役割を果たしています。今日はその活動の継承とこれからのいい川辺づくりについて考えます。

まず、豊田市の水辺愛護活動についてご報告します。その次に、天竜川の竹林活用事例についてご講演頂きます。そしてその後、水辺愛護活動をどう継承し、どのように川づくりをしていくかについて意見交換をしていきたいと思っております。

それでは、「豊田市の水辺愛護活動とめざす川辺の姿」ということで、矢作川研究所の吉橋研究員と私からご報告させていただきます。

まず、今日報告する水辺愛護活動の舞台になっている矢作川流域と河畔林についてご紹介します。

矢作川は、長野、岐阜、愛知の3県を流れ下り、三河湾に注ぐ一級河川です。黄色の線で囲われているのが降った雨が矢作川に注ぐ矢作川流域、そして、赤い線が愛知県の豊田市域を示しています。今日お話しする水辺愛護活動が行われているのは、この矢作川が豊田市を流れている範囲で、お配りしましたお手元の用紙にも、この地図が掲載されています。

矢作川の非常に大きな特徴の一つが、農業、工業、上水道、発電用と、水利用率が平均で4割以上と、とても高くなっている、中部地方の河川としては非常に高い水利用率になっているということが挙げられます。

河畔林は、この図に示したように、陸上や水中の生き物のすみか、水質保全や護岸、そして、地域の生物や景観資源と、極めて多面的な役割を果たしています。そして、川が氾濫して水をかぶったり折れたり流されたりしても耐えられる性質を持った植物で構成されています。

この河畔林、矢作川ではどのような姿になっているのでしょうか。昔と今の姿を描いたイラストがこちらです。この昔の川の姿は、古い空中写真や風景写真、聞き取りなどから再現しました。今から約60年前の矢作川は、砂河川を象徴する真っ白な砂浜で覆われた場所が多く、護岸のために植えられた薄いまばらな竹林とアカマツ林が点在し、陸から川の中にかけてなだらかな傾斜が落ちている、見通しのいい川辺でした。

現在、その様子はすっかり様変わりしました。植生に覆われ、竹林は拡大し密生化してしまっています。そして、ところどころに落葉広葉樹の高木が見られます。

このような変化はなぜ起こったのでしょうか。

まず、水の利用量が増えて川の流量が下がったことで、少ない川の水がいつも同じところを流れるために川底が下がり、逆に河川敷、川岸には土砂が堆積して高低差が大きくなりました。そして、同時期に生活様式が変わり、川辺の草や竹、木などを伐って利用することがなくなりました。こうしたことが原因で、もともと川岸に薄くまばらに植えられていた竹林が密生化し拡大してしまいました。そうしたことで、川らしい荒れた環境に耐えて生きられる、ここに例を示したような、名前に「カワラ」とつくような生き物たちが生息環境を奪われて姿を消してしまいました。また、常緑植物である竹が増え、広が

ることで林内が暗くなり、生物多様性が大きく下がってしまいました。こうしたことが起きているのが矢作川の河畔林の現状です。

それでは、ここで水辺愛護会活動の研究をしてきた吉橋研究員にパトタッチします。

○吉橋 吉橋と申します。よろしくお願いします。水辺愛護活動の始まりからこれまでをご報告します。

報告に先立ちまして、これまで調査にご協力下さった皆様、本当にありがとうございます。この場をお借りしましてお礼申し上げます。また、ふだん愛護活動をして下さっている方、それから、活動して下さっている方を見守って下さっている方々、本当にありがとうございます。

では、今の洲崎研究員の最後のスライドにも重なりますがすけれども、人々の暮らしの変化と竹林の拡大、密生化について、大変簡略化したものですが表にしてみました。

まず、産業の変化によって竹や草の採取がなくなりました。また、上水道の普及によって洗濯や洗い物を川辺でしなくなりました。水質汚濁や学校にプールができることによって子どもの川遊びも見られなくなりました。そうしたことで、「川ばなれ」という人と川の距離が離れてしまう状況が起きます。それが竹林の拡大、密生化につながり、それがまたさらに川ばなれにつながってというような悪循環が起きてしまいました。そして、川面が見えない、川にたどり着けない状況になってしまいました。それを何とかしようということで水辺愛護活動が始まっていきます。

こちらは豊田市の主な水辺愛護団体の活動場所を示したものです。これに載っていない団体もありますが、今日触れる団体について書いてあります。

まず、赤い丸で示したものが水辺愛護会と呼ばれる



19団体のご紹介です。また、この愛護会につきましては、私からも少しご紹介しますが、また後ほど有間竹林愛護会の原田会長様より、ご紹介を頂きます。そして、スタジアム前ではNPO法人矢作川森林塾さんが活動をされています。

緑で囲ってありますが、わくわく事業制度を活用している猿投台地区の5団体です。

そして、トヨタ自動車株式会社・トヨタグループの従業員の皆様が久澄橋から長興寺にかけての間で活動を2016年、2017年になさっておられます。このことにつきまして、後ほど田中様よりご紹介を頂きます。

次に、水辺愛護団体の活動年表です。この上の5団体につきましては、20年以上活動をされています。5番目の石倉水辺公園愛護会の今井会長様には後ほど意見交換の時に登壇を頂きますので、そこでなぜ20年も続いてきたのかということをお話したいと思います。

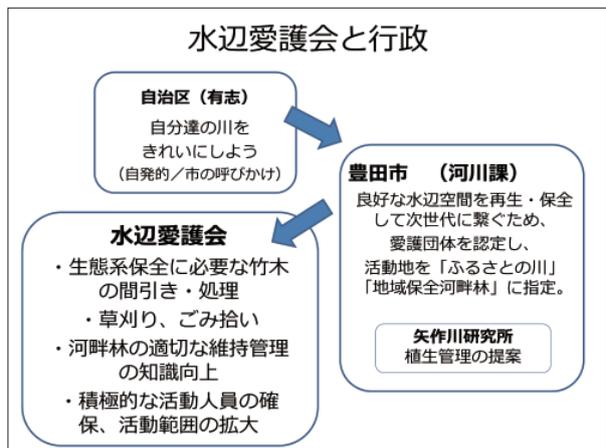
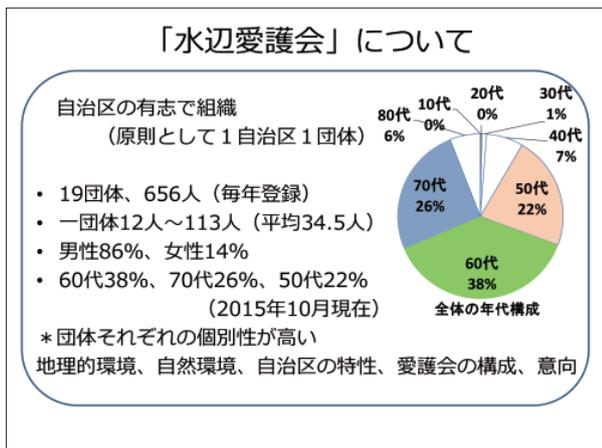
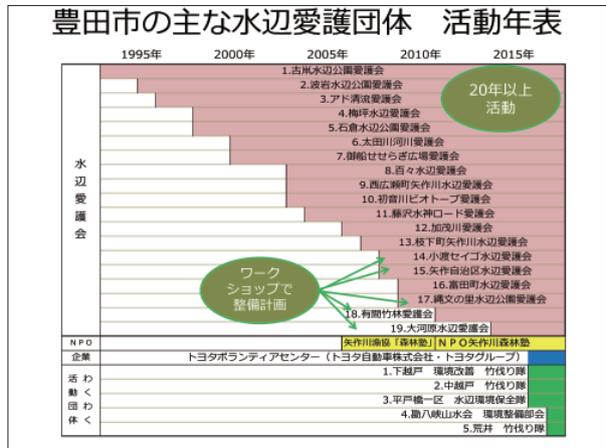
この緑の矢印でお示した5団体につきましては、住民の皆様と豊田市とでワークショップを行い、整備計画を立てて愛護活動を始められています。そして、NPO矢作川森林塾さんは、この1月で12年、活動を毎週さ

れておられます。トヨタボランティアセンターさんが取りまとめをしておられる活動は2016年度から、それから、わくわく活動団体も2016年度から3団体、2017年度から2団体が活動をされています。

では、私のほうで水辺愛護会について特に詳しく調査をしてまいりましたので、愛護会についてご紹介をさせていただきます。

水辺愛護会は自治区の有志で組織され、原則として1自治区1団体となっています。19団体650人ほどが登録をされています。そして、会員数は12人から113人と幅があり、平均は34.5人となっています。男性が86%で女性が14%。男性のみの団体も10団体あります。60代が最も多く、70代、50代の順で、60代、70代の方々が主力となって活動をされています。団体それぞれの個性が高いということも特徴で、地理的環境や自然環境、自治区の特性や愛護会の構成、意向などもそれぞれ大変違ってきます。

愛護会と行政の関係について、簡潔にまとめてみました。まず、自治区の方で自分たちの川をきれいにしようということで、自発的にやろうという思いが固まる場合もありますし、市のほうから呼びかけをさせて頂いて、



それに応じて頂くこともあります。豊田市は河川課が窓口となりまして、良好な水辺空間の再生や保全をして次世代につなぐために愛護団体を認定して、活動地をふるさとの川、地域保全河畔林に指定します。研究所は、植生管理の提案を随時してまいりました。そして、水辺愛護会は、生態系保全に必要な竹木の間引き処理、草刈りやゴミ拾い、河畔林の適切な維持管理の知識向上、積極的な活動人員の確保、活動範囲の拡大などを行うことになっています。

ここで初の水辺愛護会「古巣水辺公園愛護会」をご紹介します。この言葉は会員さんの言葉です。「ひさしぶりに古巣の川へ戻ったら、昔の子どもの頃と違って、川へ入れんくらい竹が密生して、竹藪がもうブッシュ、ブッシュ。これはほかっちゃおけんなどいうことで伐り開きを始めた」。1992年に近自然工法による整備をきっかけに古巣水辺公園ができます。翌年、地元の方々が古巣水辺公園愛護会を設立しました。

左側の写真を見ますと、岸まで藪が迫っています。また、右の写真では、護岸はできていますが、やはり厚い藪に覆われています。こうした場所を竹伐り、草刈りすることで昔遊んだ川の風景を発掘するのだということで活動を継続してこられました。

では、ここで、スライドショーを用いまして活動の様子と活動によって得られた眺めをご覧頂きたいと思います。幾つかの愛護会の活動の様子を春、夏、秋、冬の順に並べてみました。

春は、どんどん伸びてくる竹を伐っていきます。長く伸びた竹は太くなり、運ぶのに一苦勞です。

夏は、切っても切っても伸びる草との戦いで、特に雨の後は草がぐーんと伸び、草刈機が重くなって腰が痛くなるそうです。滴る汗をタオルで拭いて、また作業に戻ります。

秋は、紅葉を見ながらの草刈り、竹伐り。

そして、冬は、竹林を集中的に伐ったり、伐りためておいた竹や落ち葉を燃やして処理をしたりします。活動地が草地だけの団体は少しお休みをされたりもします。

どの愛護会も途中で休憩を挟みます。お茶を飲み、パンや肉まんなどを食べ、時には猪汁の振る舞いもあります。休憩時間は、和気あいあいと、とても楽しい時間になっています。

そして、こうした活動によって、このように水辺の眺めのよい空間が守られています。川面が見えて、川まで近づくことができます。

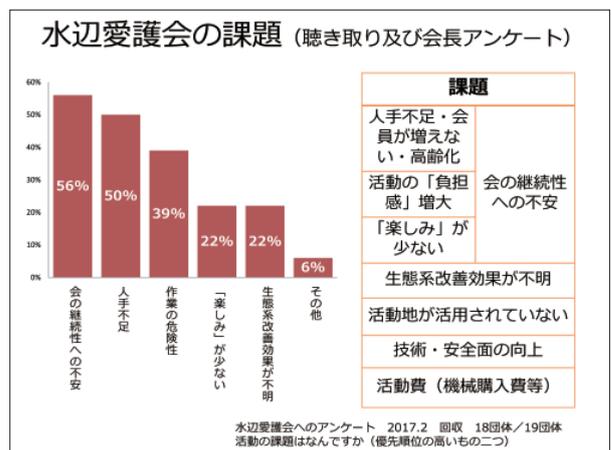
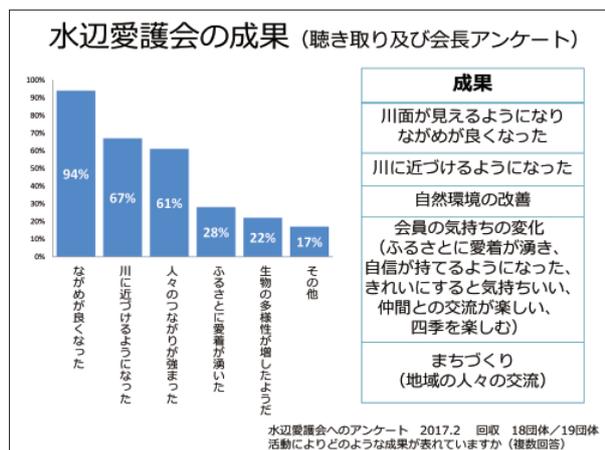
愛護会の皆さんの声を幾つかご紹介します。

「矢作川沿いは本当にきれいになった」「竹に覆われていた道路も、日当たりがよくなって凍結するのが減ったんじゃない」「対岸から見るときれいだよ」と効果を実感されている方々がいます。また、「活動は結構楽しいよ。家におるとだんだん世間が狭なっちゃう。みんなで何かやらんと」という方もいらっしゃれば、「情性でやるとる。みんなやとるから足抜きできん」と笑いながらおっしゃる方もいます。「もう80歳超えとるけど、みんなの顔を見ると元気が出るから頑張っています」という方もおられます。

この活動を、ある方は「わしらがこの場所を「守り」をしとる」と表現されました。暑い夏も寒い冬も子守をするように、見守るように、川辺を守っておられる皆さんのおかげで、人が川に近づける空間、気持ちのよい眺めのある空間が維持されています。

ではここで、愛護会の成果と課題についてご報告したいと思います。

これは、愛護会の会長さんにお聞きしたアンケートの結果です。まず、愛護会の活動による成果ですが、複数回答で、「眺めがよくなった」というのが94%、「川に近づけるようになった」「人々のつながりが強まった」



などが60%以上あります。「ふるさとに愛着が湧いた」「生物の多様性が増したようだ」という答えもありました。他に、「ふるさとに自信が持てるようになった」、「きれいにすると気持ちがいい」、「四季の変化を楽しむようになった」というような声が聞かれました。次に、水辺愛護会の課題です。これは、優先順位の高いものを二つだけ教えて頂きましたので、先ほどのパーセンテージとは単純に比較はできませんが、56%の愛護会が「会の継続性への不安」を抱えておられます。また、半数の愛護会が「人手不足」、そして「作業の危険性について課題がある」という愛護会も4割近くあります。ほかに、「楽しみが少ない」「生態系の改善効果が不明である」などの課題が挙げられました。

このアンケートや聞き取りをまとめたものが右側です。左にあるもののほかにありますのが、「活動の負担感が増している」「もうやめてしまいたいのだけだな」というような声もお聞きしたことがあります。また「活動地が活用されていない」ことや、「高齢化に伴って、また機械を導入したいのだが、そうしたもまで買う活動費がない」というような声がありました。

この課題の背景を少し探ってみたいと思います。

左側が昔の水辺と地域社会の関係性です。かつては水辺にたくさんの機能がありました。渡し場があったり、それから、畑があったり洗濯をしたりですね。それから、「遊び仕事」というのは山菜を採ったりすることなどで。生業にはならないけれども、楽しい自然の恵みを受けること、こうしたことで、かつては守りをすることと、それから恵みを受け取る、この循環があったと思います。

けれども、今では水辺に用がなくなってしまいました。かつてのような多様な機能が失われ、今は眺めをよくしようということを守りをしてはいますが、この受け取る恵みが少なくなってしまっているのではないかと思います。

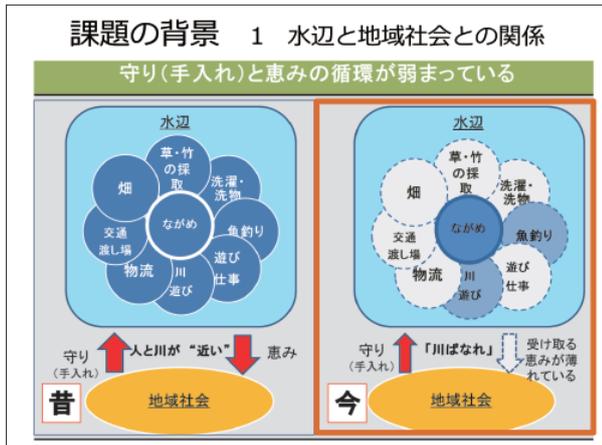
います。

もう一つ、課題の背景としては、心の中のことですね。会員のモチベーションとして、現在の会員の思いというのが、例えば「昔遊んだ懐かしい川の風景を取り戻したい」、次の代の人々にはこうした川の昔の風景がありませんので、モチベーションが下がってしまうことになります。また、現在の会員には、「対岸からの眺めを美しくしたい」という思いがあります。この背景には、対岸に自分の畑があって渡し場で渡っていたというような川を挟んだ関係性がありました。けれども今、川を挟んだ関係性が薄れてしまっています。ほかにも「ふるさとをよくしたい」「よい眺めがあれば子ども世代が帰ってくるのではないか」「みんなで仲よくしたい」「誘われて断れてなくて、お役みたいに思っているよ」。こうしたモチベーションでは、コミュニティのつき合いがなくなってふるさとの感覚が弱くなってくと活動の継続が困難になってしまうのではないのでしょうか。

以上で、水辺愛護会のご報告を終わります。今から少し、短いですが、ほかの愛護団体をご紹介します。

NPO法人矢作川森林塾は、当初は矢作川漁協の森林塾として発足し、2010年に法人化をされておられます。毎週土曜日、朝6時半から、冬は7時から活動をされておられます。始まりは、竹林を伐採して眺めをよくするということをめざされて、その後、自然豊かな河畔の都市林と老人と子どもが憩える水辺づくりをめざしておられます。そして、たくさんの楽しい構想を持っておられます。この活動によって豊田スタジアムの前の竹藪が伐り開かれ、現在は対岸から豊田スタジアムがきれいに見えるようになっていました。また、森が育っています。

そして、わくわく事業という制度を活用して活動している団体が猿投台地区で5団体あり、270人の方が登録をされておられます。環境改善や散策路の整備などを目



### 課題の背景 2.会員のモチベーション

現在の会員の思い	「次の代」の人々
「昔遊んだ懐かしい川の風景を取り戻したい」	→川で遊んでいない世代はその「風景」を持っていない
「対岸からの眺めを美しくしたい」 (かつて「対岸に畑」、「渡し場があった」という関係性)	→川を挟んだ関係性が薄れると...
「ふるさとをよくしたい」	→コミュニティのつきあいがなくなり、「ふるさと」の感覚が弱いと...
「よい眺めがあれば子ども世代が帰ってくる」	
「みんなで仲良く」	
「誘われて断れず」「お役みたいなもの」	

活動の継続が困難に？

的に、竹伐り、草刈りを実施しておられます。猿投台地区は、まちづくりのテーマとして矢作川河畔の利用促進というのを掲げておられます。

以上で、水辺愛護活動のご紹介を終わります。

○洲崎 水辺愛護活動を続けている皆さんの本当に頭の下がるご努力のおかげで豊田市の川辺はとても美しい姿に生まれ変わってきました。

ここからは望ましい川辺の姿と、水辺愛護会の水辺愛護活動の位置付けについて考えていきたいと思います。

豊田市は2016年に市民が描く矢作川の将来像を取りまとめて、それを具現化するために豊田市矢作川河川環境活性化プランを策定しました。この活性化プランでは、矢作川が抱える課題を自然環境、まちづくり、河川環境管理、河川環境の利活用の四つの視点から整理しています。

これは、活性化プラン「まちづくりの視点」から見ためざす川辺の姿です。生き物を重視した河畔、人と自然が共生する河畔、そして、人が楽しむ河畔というように、人と生き物のすみ分けをして河畔づくりをすることを謳っています。これは、人と自然が共生する河畔のイメージです。水辺愛護活動を行ってきた皆さんの活動は、人がアクセスできる川辺をつくり維持するのに大きな役割を果たされてきました。

これは、活性化プランの「河川環境の利活用の視点」から見た、めざす川辺づくりの体制です。身近に感じる河畔の整備として、住民と行政の「共働」というものを掲げています。また、愛護活動の積極的かつ持続的な参加ということが示されています。めざす川辺の姿だけでなく、めざす川辺づくりの体制という点からも水辺愛護活動を続けられてきた皆さん、その中には20年以上もの長きにわたって活動されているところもあり、こうし

た皆さんの果たされてきた役割は極めて大きいものだったということが言えます。

この皆さんの活動をもっと楽しく、もっとやりがいのあるものにする、そういうことはできないだろうかということを考えました。

これは、活性化プランとこれまで矢作川研究所が行ってきた河畔林調査の結果から描いた望ましい川辺の姿のイメージです。これは矢作川の現在の姿をベースとして描かれています。

その構成要素の一つは、明るい竹林です。面積が抑えられ、密度が1㎡当たり1.5本から2本まで下げられたまだらな竹林というのが存在している状態です。

それから、若木のある落葉広葉樹林です。矢作川の川辺から竹林の中に小面積の落葉広葉樹林が点在しているのですが、調べましたら、そこは希少種を含むさまざまな森林性の生き物のすみかになっていることが分かりました。ただし多くの林が大人になった木ばかりで構成されていて、次世代を担う若木が殆どありません。こうした林の中に十分な光が届き、若木が育っていて、これからも世代交代していけるというのが望ましい状態です。

このような明るい竹林や落葉広葉樹林には、林の中にさまざまな植物が生え、それを食べたり、さまざまな用途に利用できる状態にあります。

構成要素の三つ目は、生き物の豊かな草地です。適切な草刈りが行われ、多様な植物が花をつけます。そして、鳥や虫などの小動物がここを隠れがやねぐら、繁殖の場所として利用できます。

4番目は、エコトーンの植物です。陸から川になだらかに移行する移行帯が確保され、川らしい水に洗われる環境が維持されて、希少種を含むさまざまな川らしい植物が生育できる空間があるということです。

### めざす川辺の姿 (活性化プラン・まちづくりの視点)

- **生き物を重視した河畔**  
陸～水中の移行帯、エコトーンを形成して生き物の生息環境を再生
- **人と自然が共生する河畔**  
生き物の生息空間に影響を与えない範囲で、人が川岸まで入り込める空間を整備
- **人が楽しむ河畔**  
水辺まで快適に人が行き来でき、休憩できる空間を整備



### めざす川辺づくりの体制

(活性化プラン・河川環境の利活用の視点)

- **身近に感じる河畔の整備**  
住民と行政の共働による河畔づくりの実施
- **愛護活動の積極的かつ持続的な参加**  
愛護活動により得られる資源の商品化と新たな楽しみの提供  
行政による支援システムの構築  
河川愛護活動の市民への情報提供



水辺愛護団体の果たしてきた役割が大きい!

こうした川辺にはたくさんの恵みがあります。竹林の恵みとして、今、会場にいっぱい並んでいる竹灯籠やさまざまな用途に使える竹パウダー、そして、これからお話のある竹筏やメンマなどをここに挙げてみました。

落葉広葉樹林の恵みとしては、薪や木工製品のほかに、矢作川の川辺に多いヤブツバキやチャノキを使った椿油やお茶などを挙げてみました。

こうしたたくさんの恵みというものを活用することで、愛護活動を行う皆さんが、川辺の環境がよくなると川の恵みが増える。川の恵みが増えると、さらに川の環境がよくなって愛護活動が楽しくなる、そんなすてきなサイクルができないか、人と自然が共存共栄できるような循環ができないだろうかということを考えました。川の恵みを活用した「守り」ができないだろうかということです。

最後に、水辺愛護活動の継承と発展ということを考えてみました。先ほど示された水辺愛護会の課題の表がこちらです。それに向けて取組案を考えてみました。

ここでは特に、生態系に配慮した楽しみ、恵みをつくること、そして団体同士の連携の強化というものが有効ではないかということを考えました。水辺愛護活動の活動地は、どこも個性豊かで、生えている植物や棲んでいる動物もさまざまです。そうした中で活動地の自然に合った楽しみ、恵みを得るということは、持続可能で複数の課題の解決につながると考えられます。川の原風景や原体験を持たない世代にも、川の魅力や川を活用する楽しさを伝えるきっかけになると思います。活動団体同士の交流は、苦勞を分かち合うことや他団体の活動から刺激を受けることで、活動の励みになったり、新しいアイデアやヒントが生まれるきっかけになります。また、企業が社会貢献活動や人材育成の一環で水辺愛護団体の活動に加わることも愛護活動の活性化につながるで

しょう。

研究所は楽しみの例として試行的にニホンミツバチの養蜂を始めています。定期的な愛護活動とミツバチの巣箱の管理をセットにし、適切な草刈りや竹伐りで花をつける植物を増やし、蜜源を確保する、そして、ハチミツを集めて地域とのつながりや新たな会員の確保をすることです。

これは、今年度設置された巣箱と採蜜会の様子です。ニホンミツバチと巣箱、採蜜会のために切り出された巣の様子です。これは、適切な手法で草刈りを行うことで花を増やし、そして、ハチミツという恵みを得ることですけれど、こうした川の恵みを生かした川辺づくりの提案をこれからも考えていきたいと思っています。

まとめです。矢作川研究所としては、植生や動物など生態系に配慮した楽しみの創造と再発見、そして、ホームページや刊行物を活用した愛護活動団体の情報発信や共有を通じ、活動団体同士の連携の強化を進めたい。そして、これらを通じて活動地の特徴を生かした、楽しみながら続ける水辺愛護活動のサポートをしていきたいと思えます。

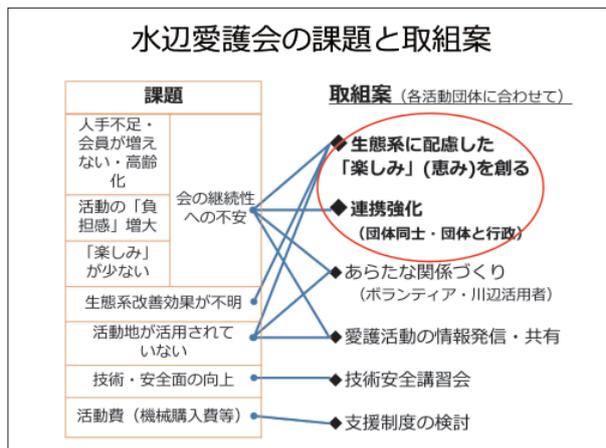
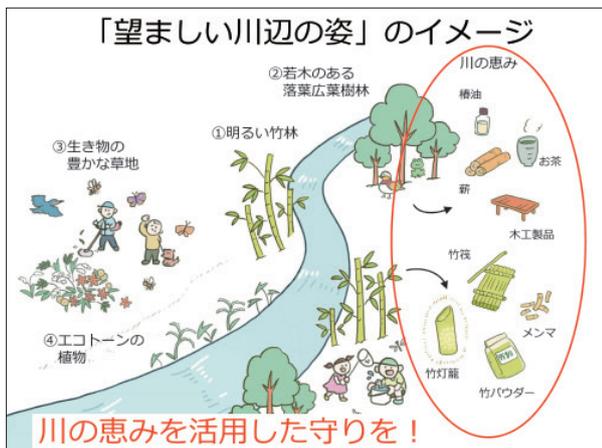
以上です。どうぞご清聴ありがとうございました。

<sup>あんま</sup>  
「有間竹林愛護会の活動」

○司会 次に「有間竹林愛護会の活動」と題しまして、有間竹林愛護会会長の原田茂男様よりご報告頂きます。原田様、よろしくお願ひ致します。

○原田 有間竹林愛護会の原田と申します。私たちの活動の様子をお話しさせていただきます。

私たちが活動しているのは有間、有る間と書きまして、よく「ありま」と読んでしまうわけですが、「あんま



と読みます、有間町の中にある竹林です。

私たちの活動地は、18番目に愛護会を立ち上げたところ。笹戸町と小渡町の間、やや笹戸町側にある竹林、河畔林の整備を行っております。

愛護会の立ち上げは2011年4月1日です。2017年度の会員数は32人。男性、女性、ほぼ半数です。当初は19人で立ち上げましたが、男性ばかり。後からお話しますが、タケノコの採取がありますので、タケノコの採取は女性会員に主にやっていくということで、女性の方たちも会員として登録をし、現在、32人です。活動は、竹を伐る、竹林の整備、景観整備ということが大きな目標でありまして、さらに、この私たちの竹林はハチクの林ですので、タケノコが食用になります。その有効活用もしているということです。

こちら側が上流、これが左岸です。ここの密集した、荒れた竹林を整備することをめざしました。対岸から見た活動前の写真です。

2010年にワークショップを行い、活動の計画を立てました。これは県道で、これが有平橋という有間町にある橋です。ここの下のこのエリアも竹林で、約5.5haです。これを皆伐ではなくて間伐し、タケノコを育てながら竹林の再生をして、それに伴い周りの景観をよくしていくという作業をしています。10年を活動最終目標にし、前期5年、後期5年に分けて進め、現在、後期の2年目が終わろうとしております。

作業を効率化するためには、どうしてもこの竹林の中に管理道路が必要です。この赤いところに、豊田市さんの援助を得まして管理道路をつくり、更にわくわく事業の補助も受けて管理道路を延伸しております。

これは2010年に豊田市さんにつくって頂いた管理道路です。前はこういう竹藪でございましたが、階段をつくり、ここにこういう広場をつくりました。こちらは真っ

暗ですけど、この道路ができたおかげで、こちらがきれいになっていきました。

とにかく私たちは竹を伐る、ただひたすらに竹を伐るということで進んできました。伐った竹をこのように集めて、処理をお願いしたり、自分たちで河原で焼却したりしております。ここは竹のないところの草刈りです。

作業を始めて1年目、2年目は、前へ前へと進んでいったわけですけども、3年目になりますと、後ろを振り返ると、後ろに小さい竹、草等々が生えてまいります。私たちは振り返り間伐と言っておりますが、前へ進みながら後ろを間伐していくということで、進む進度がかなり遅れてきております。

こんなこともありました。2013年の9月、台風による洪水の被害を受けて、せっかくきれいに間伐した竹林が全て倒れてしまいました。管理道路も使えなくなりました。これも修復作業が非常に手間取りました。あわせて2014年の2月は雪による竹の被害がこんなにありました。これを取り除く作業でかなり手間取りました。

整備が進んで来た竹林です。対岸から見て、このようにきれいになっております。竹と竹の間も隙間ができ、光が、あるいは向こうが、川が見えるようになってきました。この状態からこのようになりました。

竹を伐る、間伐をする、それ以外に竹の恵みによるいろいろな取組をしております。先ほども言いましたが、ハチクの活用ということで、これが顔を出すハチクのタケノコです。これを地表から大体40センチから50センチを鎌で切り取って、皮をむき、籠に入れて、小渡町の商店主らでつくる旭夢づくり研究会にお願いし、水煮の「夢たけのこ」というタケノコを市販して頂いております。これの材料提供をします。

更には、女性たちのイベント、「竹の子家」という商店名で出店する活動も行っております。竹林で出るタケ



ノコを自分たちが食さなくて全て出荷しては意味がないではないか、自分たちも味わおうということで、タケノコご飯を炊いて、この河原でみんなで食事をする食事会を行いました。最初は会員とその家族でしたが、だんだんと関係団体の方も出席頂き、多い時は70名ほどが、ここの河原で懇親を深めました。これはタケノコご飯と、竹器によそったデザートです。

さらに私たちは勉強会を行いました。矢作川研究所の洲崎研究員にお願いをして、「竹林の役割」と題していろいろお話を聞きました。

子どもたちとのふれあいも進めております。幼稚園児によるタケノコ採り体験です。これはその後、おやつを食べます。小渡小学校の竹学習で、タケノコはどこから出てくるのかということを知り、実際に地面を掘って根っこを観察しているところでもあります。

ボランティアも受け入れております。愛知工業大学、愛知学泉大学、相山女学園大学からの応援を得て作業をしております。さらに、企業関係も受け入れております。去年は、大和ハウス工業さんに20名ほど来て頂いて作業を進めました。

休憩所もつくりました。これは、わくわく事業の補助を頂いてつくったものです。活動日の前のミーティング、あるいは途中の休憩に大変便利に使っております。活動の拠点となっている場所です。

活動の成果としては、「非常に景観がよくなった」「竹藪がきれいになった」「地域の人が川に再び近づけるようになった」「川の風がこちら側まで吹くようになった」「活動しながら住民同士の絆が深まった」「タケノコが活用できた」というような成果がある反面、「会員の高齢化による人手不足」という課題もあります。大きな深刻な問題です。会が継続していけるかどうか、ちょっと不安であります。私たちは今後も多くの皆さんのボランティアの支援を希望しております。

差し込む太陽を受けながら私たちは、高齢老体にむち打って活動を続けていくつもりです。

以上で報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

○司会 原田様、ありがとうございました。

「矢作川を見たい！ トヨタ自動車・トヨタグループ従業員による竹林伐採ボランティア活動」

○司会 引き続き、「矢作川を見たい！ トヨタ自動車・

トヨタグループ従業員による竹林伐採ボランティア活動」と題しまして、トヨタボランティアセンターの田中 建三様よりご報告頂きます。

田中様、よろしくお願い致します。

○田中 皆さん、こんにちは。トヨタボランティアセンターの田中です。矢作川で行いました2年間の活動につきまして、私のほうからご報告させていただきます。

テーマは、「矢作川を見たい！」です。これまでの矢作川の河川敷につきましては、上流を見ても下流を見ても、皆さんご存じのように、竹藪の壁でした。かつて護岸のために植えられた竹が時代とともに使われなくなり、密生化した竹が河川敷を覆っていました。

今回の活動につきましては、人の手で崩したものを人の手で取り戻し、生き物が棲みやすい環境と河川敷が見える風景を50年ぶりに取り戻すことに挑戦した活動がありました。

また、竹林を伐採することで豊田市のヒートアイランドを軽減する効果を高めることと、景観整備によって防災に貢献することが目的と従業員に訴え、共感を得ることができ、情熱を持った従業員、合わせて3,000名の方に参加して頂き、行動で示して頂きました。目標でありました長興寺から久澄橋までの1.2kmの竹林を伐採することができました。年輪を刻むとともに、新たな挑戦に向かっていくことができました。それでは、どのような成果があったのか、実際に写真で説明させていただきます。

上流を見ても、下流を見ても、このように全ての竹林を伐採することができ、私からすれば感無量であります。これもひとえに産学官連携の成果だと思います。矢作川研究所の山本さんがドローンを飛ばして上空からも写真を撮って下さいました。いいですね。感無量です。

それでは、2年間を振り返りながら、矢作川での活動を皆様にご説明したいと思います。

2016年の4月に矢作川の竹林伐採がスタートしました。当日は太田市長、そして、国土交通省豊橋河川事務所の関所長がお見えになり、これほど注目をされている活動だとは思ってもみませんでした。また、矢作川研究所の皆さんからは竹林伐採の必要性を学び、矢作川が見えるまで頑張ろうと意気込んでスタートしてみましたけれど、余りにも竹が多過ぎて、伐っても伐っても先が見えてこないと嘆きながら自分も竹を伐ったのを思い出します。すると、こんな大木が竹林の中にあっただんですね。伐って初めてそのことに気付いたわけですけれど、これも終わってみれば、この写真のように、竹が随分なくな

りまして、改めて人の力を知りました。

また、これは5月の活動であります。伐っていく向こうに矢作川が見えてくると、やはり人は頑張るんですね。この30mの川幅の、ましてや傾斜のある坂で、無数にある竹を伐って運ぶ。本当に大変な活動だと思っておりますけれども、参加者は「傾斜も苦にはなりません。矢作川が見えるまで頑張ります」と言って一生懸命竹を伐ってくれる。そして、私も一緒になって汗を流している自分が嬉しくて、改めてトヨタ自動車の従業員であることを誇りに思った次第であります。

人は頑張れば報われるということがありますがけれども、このように矢作川をバックに写真を撮れるなんて想像もしていませんでした。いい写真が撮れました。ありがとうございました。

2016年11月には、豊田市と国土交通省も加え、640名の方がボランティアとして参加してくれました。2016年度が終了した時は、まだまだ道半ばでした。でも、この矢作川にこれだけの空間をあけることができました。その実績を示す看板を国土交通省の皆さんが設置してくれました。ありがとうございました。

2017年度につきましては、前回の矢作川研究所の研究成果報告会で、「来年の12月までには矢作川の竹林を一掃します」と無謀にも宣言したのを覚えています。そこで、2017年度の目標を「もっと広げよう！ 目標の最終ラインまで」としました。しかし、目標ははるか向こうでした。4月に上郷のEX会、下山のEX会の皆さんがスタートしてくれました。5月には2回の活動を行い、大人の方には竹を伐って頂き、子どもたちにはタケノコを伐って頂きました。ところが、あっという間にタケノコは成長して、せっかく伐って頂いたにも関わらず、元の状態になってしまいました。竹の生命力といえますか、凄さを痛感させられました。

私たちが気持ちよく矢作川で竹林伐採ができたのも、こうして矢作川の河川敷で開会式ができたのも、国土交通省の皆さんが、私たちが伐った竹の根をブルドーザーで一生懸命根こそぎ取ってくれている。だからこそできるのであって、国土交通省の皆さんに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

また、市外からも多くのトヨタの仲間が参加してくれました。やはり何といたっても嬉しかったのは、副社長の河合さんがボランティアで参加して下さったことであります。これで一気に矢作川の竹林伐採の士気が高まりました。

これは、最終の7回目であります。目標のラインまでもう少しになり、もう目の前まで見えてきました。でも、ごらんのように、枯れた竹が入り組み、特にこの場所は密集していて、そう簡単ではありませんでした。なかなか進まない時に「無理かな」と思ったわけですが、参加者の皆さんが、「中途半端では終わりにたくない。目標を達成するのであれば休憩ももったいない」というふうに一生懸命、手を休めず伐り続けてくれました。その姿に感動しながら、また、伐っていく先に目標が見えた時に、自分が興奮しながら、参加者の皆さんも興奮して、最終の伐採をすることができました。その甲斐あって目標ラインに到達することができ、記念の伐採セレモニーとして関係者の皆さんに伐って頂きました。そして万歳をして、この目標達成の喜びを皆さんと一緒に分かち合いました。

これは2年間の活動の詳細であります。2016年度は1,090名の方に参加をして頂きました。2017年度は少しずつ景観が変わっていく、そういう姿に道路を通る、また、通勤で通る従業員の皆さんが、「私も参加したい。伐ってみたい」と言い、1,800名の方に参加をして頂きました。また、田原や衣浦から若い寮生の人たちも参加して



くれました。天候にも恵まれて、全ての活動、7回を終了することができ、感謝をしています。

この活動には、将来の小さな後継者が現れました。矢作川で竹を伐った体験は、きっと矢作川を見るたびに思い出して、忘れられない思い出になったはずであります。この小さな子どもたちに将来の期待をしております。

今後も継続していきます。高橋から川端公園までは、写真のように、全ての竹林が伐採されています。春に出てきたタケノコを間伐して竹を残した景観づくりをしていきます。とは言っても、先ほど申し上げましたように、竹の生命力を考えますと、簡単にこのような景観をつくるのは無理だと思いますけれども、負けずに何回も体験をしながら挑戦をしていきたいと思えます。

最後に、私の思いを少し皆さんに聞いて頂きたいと思えます。矢作川を整備することによって、市民の方が矢作川を見る時に本当に嬉しそうな顔をしてくれます。人の手で取り戻した河川敷が、中心市街地の水害防止だけでなく、これほど潤いのある空間になるとは思ってもいませんでした。人から「いいね」と聞くと、嬉しさが込み上げてきます。

当初は矢作川を見たい一心で始めた竹林伐採、1mの空間から矢作川が見えた時の感動、もっと広げようと活動に賛同して下さった3,000名のボランティアの皆様へ感謝を申し上げます。そして、豊田市の歴史に残るほどの活動で、この3,000名の皆様が見える河川敷に変えてくれました。また、この2年間の活動は、関係者の皆様のご支援・ご協力がなければ達成できなかったわけでありました。本当にありがとうございました。きれいになった矢作川を市民の力でみんな維持しながら、母なる川「矢作川」を守っていきましょう。

ご清聴、ありがとうございました。

○司会 田中さん、ありがとうございました。

## ■講演

「放置竹林を地域のお宝へ 『環境と観光と地域作り』  
竹で遊ぼう・竹で暮らそう」

○司会 続きまして、「竹で遊ぼう。竹で暮らそう。」と題しまして、曾根原宗夫様よりご講演頂きます。

曾根原様は、天竜舟下り株式会社の船頭をされながら、がりゅうきょう 鷺流峡復活プロジェクトの代表をされております。楽しみながら竹林整備を行い、周辺の皆様の協力を得ながら活動の輪を広げるプロフェッショナルです。

それでは、曾根原様、よろしくお願い致します。

○曾根原 皆さん、こんにちは。

長野県天竜川ってご存じですよ。私、天竜舟下りの船頭が本職でございます。今まで皆さんのお話をお聞きすると、やはりすごいですよね、ポリシーがね。景観を何とかしようという。ゴミの不法投棄の件も含めて、いろいろな活動を行ってききましたが、その活動を継続させるためにも、あと自分がエネルギーを出すためにも、一番大事なのは楽しみだと思っているんです。理念だけだと、なかなか私、動けない性分です。やって楽しいと、どんどんどんどん、気がついたら次へ次へ進んでいるという、そういった活動報告をこれから皆さんと共有しながらと思えます。

ちょっとパソコンの画面が出ませんので、どうしようかなと思っているのですけれども。

○吉橋 すみません、ちょっとお待たせをしまして申し訳ありません。この間に、私のほうから竹製品のご紹介をさせていただこうと思えます。

まず、廊下にあったのが、竹楽器ですね。バンブーサさん、ちょっとお手を挙げて頂けますでしょうか。バンブーサの三津井様や上田様は、もしかしたら、外で皆さんの出てこられるのを待っておられるかもしれませんが、矢作川のメダケを使って笛をつくっておられます。今日、お声をかけてくださったら幾らでも吹きますよということで、曲を幾つも用意して下さっていますので、休憩時間などに外で待っておられるバンブーサさんにぜひ声をかけてみてください。

それからこちらは、これからお話にも出てくると思うんですけど、竹の薪を燃やせるストーブをお持ち頂いたモキ製作所さん。ちょっとご紹介頂けますか。

○深澤 皆さん、こんにちは。長野県から来ました株式会社モキ製作所の、私、営業をやっております深澤と申します。

私どもは長野県のほうで薪ストーブや薪ボイラー、最近では、竹ストーブとか竹ボイラーというものをつくりまして、竹の有効活用に取り組んでおります。あともう一つ、結構全国的に竹林整備の決定版なんて呼ばれていますが簡易炭焼き機とか、そういった類いのものをつくっております。こういったものを使って、全国の放置竹林の持続可能な資源化に取り組んでいる会社であります。お見知りおきください。

ありがとうございました。

○吉橋 ありがとうございました。むちゃ振りをして申しわけありませんでした。

ほかに、こちらに展示をしてありますのは、先ほど有間竹林愛護会の原田会長さんからご紹介頂きました「夢たけのこ」というタケノコの瓶詰めですね。大きいほうが600円、小さいほうが450円です。ちょっと今日は販売ができないのですけれども、ぜひ手に取って頂けたらと思います。

それから、これはちょっと遠方から取り寄せました「竹するめ」というものです。カレー味です。味つけ乾燥タケノコということで、鳥取県で既にこういうことをやっている町があります。

これは、これから曾根原さんにお話を頂きますけれども、曾根原さん達が作られた味つけしゃきしゃきメンマですね。このメンマもここに展示をしてあります。

そして参考製品としまして、これは、竹の再生セルローズ繊維でできたタオルです。竹のマフラーとか竹のタオルというものが今ありまして、静電気は余り起きずに、抗菌性もあるということで、これはなかなか愛護活動の延長ではできないかと思うんですが、参考としてここに展示してあります。

そして、今回、木文化研究所さんからいろいろご協力を頂いています。これがスマホのスタンド兼スピーカーです。電気を使わずに、こちらにスマホを立てると、ここがスピーカーになり、音が増幅していい音になるというもので、インドネシアの竹を使ってスペインの会社がデザインをしたものだそうです。でも、インドネシアの竹じゃなくても、矢作川の竹でできるんじゃないかなと思います。

そして、こちらは小渡セイゴ水辺愛護会の竹灯籠と、木文化研究所さんのデザインされた竹行灯です。

以上でご紹介を終わります。

○曾根原 すみません。大変お待たせ致しました。

「放置竹林を地域のお宝へ」。先ほど言いましたように、私は天竜舟下りの船頭、観光業をしているのですが、放置竹林の対策として環境や観光と一緒に取りまぜながら、地域の人たちと一緒に活動していたら、こんな形のタイトルが生まれました。竹で遊んだり、竹で暮らしたりしていたら、環境と観光と地域づくりというものが同時に行えるようになったのではないかなと、ちょっと自分でも大げさなタイトルをつけてみました。これは竹筏

です。三連なんですよ。長さが13メートルほどありまして、この前方には、ちょっとこの光具合だと見えませんが、放置竹林が広がっていて、ぐちゃぐちゃなんです。

これから私が行ってきた事例活動をお話しさせていただきます。本当はここで動画が出るわけなんですけど、今日はちょっと動画が再生できませんので飛ばします。

これからお話しさせて頂くテーマとなる場所は、昭和36年まで「湯ノ瀬の湯」という温泉宿があった場所です。何でなくなったかという、昭和36年に三六水害という物凄く大きな水害がありまして、大水によって建物が流されて何もなくなり、ここで営業することができなくなって、ここの方々はちょっと上に移動することを余儀なくされました。それ以降、もうほぼ半世紀、誰も手をかけなくなって、しかももともと物凄い断崖絶壁の斜面な場所ですので、なかなか作業することもままならず、気が付いたらこんなになっちゃっていたんです。

私、船頭やって20年たちます。ここを舟が下っていくんですよ。湯ノ瀬というのは舟下りのコースの中でも一番の荒瀬、S字カーブで波が物凄く大きくて、一番クライマックスの場所なんです。私たち船頭は、「湯ノ瀬の乗り方がすごく難しい」などよく話をしましたが、20年船頭やっていて、本当にここに温泉宿があったのかなと思ったんですよ。

ここだけでなく、鷲流峡という渓谷自体がこういう、手の入っていない竹林が3kmほど続いちゃっている状態でした。中に入っていくとこんな感じです。こういうのがずっと続くんですよ。竹をどこから伐っていくといいかわからないというか、端から伐っていくと、途中から伐ることはできないような。それでもってやはり、木がどンドンどンドン立ち枯れしますよね。みんな竹に覆われて、日が当たらないので当然なんですけど、ニセアカシアなんか、もうぼっこんぼっこんだめになっています。桜からモミジから何からもそうなんですけど、

そこに物凄い勢いでゴミの不法投棄が増えてきたんですよ。もうゴミを捨ててくださいよというような感じになっちゃいますよね、真っ暗で。それで、私たちがゴミを拾っていたんです。やはりお客さんと一緒に観光船で下っていて、お客さんにゴミを見せていてもしょうがないじゃないですか。ゴミを拾いに行くんですけど、拾っても拾っても捨てられる。もうイタチごっこなんです。それでも諦めちゃいけないので拾いにも行っていたし、地域の行政とかに相談にもずっと行っていました。

けれどもね、やはりたらい回しです。

飯田市に鷲流峡の溪谷のゴミの不法投棄を相談に行くと、「鷲流峡は県立公園だから県の環境課に行ってくれ」と言われるんですね。県の環境課へ行きますと、「天竜川っていうのは一級河川だから国土交通省に行ってくれ」と言われるんです。国土交通省の天竜川上流河川事務所のところに行ったら、「駒ヶ根に調査課があるからそこへ行ってくれ」と。そこへ行ったらもう一回、「いやいや、まずは地元ですよ。飯田市へ帰ってください」と、3回たらい回しにされました。その辺の話は、今日、皆さんのお手元の印刷物の中に、小学館から発売されている「BE-PAL」というアウトドア雑誌、ご存じですよ、その今月号で私たちの話が特集されまして、そこに書かれています。記事のコピーが入っていますので、また後ほど読んで頂ければと思います。

それで結局、最終的には、国土交通省、長野県の環境課、飯田市の環境課と観光課、あと、オートバイとか灯油の入った石油ファンヒーターとかも捨てられているので、当然地域の消防署にも来てもらいました。それから家庭ゴミ、住所が分かるものとか郵便物とかが入っているゴミなんかもありますので警察にも来て頂きました。国、県、市、消防、警察に私の舟に乗って頂いて、実際にこの現場に舟で行って、上陸して、みんなでこの崖をよじ登ってもらって、まずこれが現実なんだということを見てもらっていたら、一番最初に消防の方が動いたんですね。灯油が入った石油ファンヒーターを見つけて、「あっ、これ、私たちが回収します、灯油が入っているので危険ですから」と。あと、ダンボールの中からぐちゃーと中身の出たゴミを拾った警察官が、「あっ、住所がある。これは私たちの管轄で動きます」と言いました。最終的には国土交通省の調査課の当時の課長が、「もうこれはみんなで問題を考えよう。どうやったら一

番いろいろな省庁がスムーズに連絡をとりながら動けるか、私が指揮をとります」ということで、ようやく飯田市の観光課が予算をつけ、飯田市の環境課が一度、鷲流峡3kmのゴミを全部撤収してくれたんですね。もうびっくりしました。動く時には本当に動くんだと思って。

でも、それでもやはり心ない人たちは幾らでもいるわけですし、ゴミは一度はなくなったんですが、また捨てられる日々が続き、拾いに行っていた。一番ショックだったのは、ゴミを拾っていたら上から瓶が落ちてきて、私の横で割れたんですよ。その時、「ああ、もうこれはただただ拾っているだけではだめだな」と思って、ちょっと視線を変えてみたんですよ。川の上から景観を見ながら。そうすると、竹ばかり生えている。

今頃気が付いたのかと突っ込まれそうなんですが、毎日毎日、1日に4回も5回も同じコースを乗っていると、日々の変化になかなか実は気が付かなかったりすることって多いんです。ちょっと一歩踏み込んで、また違うところから見てもたら、「ああ、こんな真っ暗なところで、幾らゴミ捨てるな、捨てるなど言ってもだめだ。紅葉も、そういえば昔のほうがかもっときれいだったしなあ、春の新緑ももっときれいだったはずだよな」と思いました。「ほいじゃあ」ということで、私が船頭の仲間に竹を伐ろうと声をかけたら、何人か、「おう、やりましょう、やりましょう」ということになった。とりあえず地主さんのところに挨拶に言って、「伐らしてくれ。少し間引かせてくれ。伐った竹は全部運び出すからやらせてくれないか」と言ったら、「ああ、じゃあやっていいよ」と言ってきて、スタートしたんですよ。

無謀でしたよね、やはり最初はね、3kmの溪谷、両側合わせれば6kmになるんですけども、船頭をしている人間が手ノコで立ち向かい出したわけですよ。現場までは行けます。上からはとても降りてこられるような緩



まっくら・ゴミの不法投棄・季節感ゼロ(>\_<)

.....

舟で「ゴミ拾い」 ←

上からビンが降ってきたあ ←

こいつまでたってもイタチこっ ←

もっと根本的に???? ←

そういえば紅葉もさえないなあ..... ←

竹だらけやんかあ..... ←

よくよく見ると..... ←

..... ←

よっしやあ.....!! 一丁やっ ←

たるかあ.....!!

やかな斜面じゃないんですが、舟で着けておいて、伐った竹を舟に積み込んで運び出したんです。舟下りって、時又港というところが終点になるんですが、そこからは舟に積んだままトラックで弁天港という私たちの出港する港まで行って、竹をどんどん運び出しました。それで、溪谷の中まで徐々に徐々になんですが、きれいになっていったんですよ。そのかわり、私の会社の社員駐車場に竹が山になってきたんです、どんどん、どんどん、どんどん。「何かおもしろくないよな」と思ったんですよ。駐車場にただただ竹が山積みになって、それがだんだん、だんだんかびるでしょう。結構竹って、すぐに黴かびるんです。にゆるにゆるするし。何か活用方法ねえかなんか思っているいろいろ考えました。

そうしたら、天竜舟下りの舟って、もともとは筏なんですよ。徳川家康さんが、「南信の材が物凄くいいから、とにかく海まで出せ。それで、江戸へ運んで江戸城を建てるぞ」と言いました。1607年だったかな。そういう令によって、この天竜川で最初は丸太を流したのですが、それがだんだん、筏に組んで海まで出したほうが効率がいいということになりました。その後鉄道ができる、筏が無くなって舟に替わった。要するに、私たちの職業のルーツな訳ですね。それに、竹を伐ると書いて筏だから、そういう意味でも、「これはやらなきや、ちょっとおもしろくないわな」と思ってやってみたんですよ、こんな感じで。

作り方も何もないのですが、何となくやってみたら、おもしろいんですよ。物凄くおもしろい。ただやはり、舟より操船は難しいですね。喫水性は悪いし。そのかわり、難しい分だけ、はまります。ひたすらはまってね、最初、船頭たちだけで遊んでいたんですよ、仕事が終わった後。夏なんかは仕事終わった後、十分遊べますから。そうしたらある日、見ていた人たちが、「おい、何か船

頭たちが変なことやっている。何だ、ありゃ」と言った。天竜川ってラフティングとかがすごく盛んですから、県外からボートを持って下っている人たちがいる。そうしたらいきなり横から何か変な乗り物が来るから、「なんじゃあ、こりゃ」という感じで、だんだん噂が噂を呼んで、「おい、おれたちにも乗らせてくれや」みたいな話になったんですよ。「そんなに乗りたいたんだったら、これは商品じゃないからお金取るわけにいかないんだけど、保険料だけもらって一緒に下りましょう」っていう感じで、天竜川で遊び倒していたんですよ。

先ほど言った、舟下りの終点になる時又港では、年に一遍お盆の時に「飯田時又灯ろう流し」という物凄く大きな灯籠流しと花火大会が行われます、そのためにJR飯田線の臨時列車が出るくらいの、歴史のある大きなイベントなんです。せっかく地元で伐った竹で時又港を活用しているうちらとすれば、この竹筏というものを使って、時又港の灯籠流し、ちょっとマンネリ化しているところもあったので、灯籠流しが始まる直前に、わあっといきなり竹の筏で港に入っていくことによって、観客の人たちを驚かしちゃおうかということ、ちょっと仕組んだんですよ。ただ、本当にゲリラで行くので、多分間違いなく怒られるなと思ったんです。でも怒られた時に、ちょっと怒られ方を軽くするために、この旗に「世界平和」って書いてあるでしょう。これね、時又港の灯籠流しのスローガンが世界平和なんです。思い立ったのがその日の朝だったので、実は、この旗の生地は、私がおその日の朝まで寝たベッドのシーツなんです。そのシーツをがあとと切って、「世界平和」と書いて、それを竹にくっつけて、これで行くぞと。もう怒られても、「えー、世界平和だよ」って言って逃げようと思って突っ込んでいったんですけども、凄く大歓迎されたんですよ。



これは、その灯籠流しの時の様子なんですけれど、ここへだあっと入っていった。そうしたら、「竹筏で竹林整備をアピール 天竜舟下りの船頭5人」という新聞記事になった。しかも地元新聞社の4紙とも、みんなで大歓迎なムードで記事を書いてくれたんですよ。

ただ、これは裏話がありまして、「こんなことをやるよ」と言ったら、会社からNGが出たんですよ。やっちゃだめだと。「もし何かあったら、舟下りっていうところが事故起こしたことになるから、やっちゃいかん」と言われて。どうしてもやりたかったので、よく見て頂くと分かるんですが、『有志の会「天竜筏祭り」の代表 曾根原宗夫さん(49歳)』と書いてある。ああ、この時49だったんだな。船頭の格好をしていますけれども、実は「天竜筏祭り」という勝手な市民団体を立ち上げて、「天竜筏祭りでやります」というふうにしてやったんです。だから、もし事故とか起こした時には、筏祭りという市民団体がやったんだからということで、悪ふざけで終わらせようと思ったら、結構いい具合になったんですよ。いい具合に持ち上げられたら、今度は会社が「あっ、これ、うちでやることにしない？」という話になったという。その後の話もあるんですけど、とにかくこれで地域の方々へのPRも結構できたかなと思います。結局、竹というものでこんなに遊べるんだよ、自分たちの邪魔物でもこんなに遊べるんだよということもPRしたかったというのもあって、こういうことも仕掛けたわけです。

竹も遊んでいくうちに、だんだん乾燥して割れてきちゃいますよね。もともと割れてなかった時は、全部がフローターの役目を果たしていたものが、割れて水が入っちゃうと、ほとんど沈み出してしまうわけですね。そうすると、「あっ、もうこれ、筏としての竹の寿命は全うしたな」と思ってばらしていたんです。今度はこれが山になっていったんです。どんどん、どんどん、また会社の裏に。「これもまたおもしろくねえな。何とかいい活用方法ないかな」と思っていたら、ちょうど運よく、あそこにある竹ボイラーですが、飯田市のお隣の阿智村というところで「この竹ボイラーを使って家の給湯を賄っている人がいるよ」と教えてくれた人がいたんですよ。「えっ、そんなのあるの？」っていう感じですよ。

とりあえず電話番号を聞いて、その人に電話してみたんですよ。「実は私たち、天竜川で竹筏流している船頭なんだけれども」と言ったら、向こうから「ああ、知ってます、知ってます。新聞でも見ました」と。「実はもう筏としての寿命は終わっちゃって、割れているんだけど、枝も払って、きれいに枯れている長さが4mの竹

が山ほどあるんだけど、お宅で要る？」って聞いたら、「いやあ、もう欲しい。実は、竹ボイラーってすごく便利なんだけれども、竹をそこまでするのが結構手間なんだよね」と言うんですよ。うちからすると、「竹を持って行って、エネルギーとして貰ってもらえる。こんないいことはないじゃないか」ということで、「じゃあ、取りに来て」と言った。取りに来たのを一緒にプレスリリースかけたら、また新聞社、地元4社がみんな来てくれて、「何だ、鶯流峡で筏にして遊んでいた竹が、今度はエネルギーとして嫁いでいくんですね」と書いてくれた。これによってすごくすっぴんしたんですよ。何か、その都度その都度壁にぶつかるんだけど、「あっ、今度はエネルギーとして、また活用してもらえるんだ」となると、「あっ、これでどこもストップすることがなく、これは循環ができたな」と物凄くすっきりしたんですよ。

「こんなにすっきりするものは、自分たちだって使わない手はねえじゃねえか」ということで、私たちも翌年竹ボイラーを導入しました。竹筏やっても、ラフティングやっても、皆さん、天竜川でばちゃばちゃ泳いで遊ぶので、当然お風呂に入りたくくなりますよね。そうしたら、遊んで帰ってきた後、今までは筏にして遊んでいた竹が、今度はエネルギーになって、沸かしたお風呂にお客さんたちが入って温まれるようにしました。ちなみに、この湯船ももともと舟下りで、普通にお客さんを乗せて下っていた舟です。十数年すると、廃船といって、もう舟としての寿命は終わるんですよ。12メートルある観光バスと同じ長さのどかい舟で、それを全部湯船にすると大きすぎるので、前と後ろをくっつけて、真ん中だけ抜いたような状態にしてお風呂にした。これが本当の「湯船」というやつなんですよ。ありがとうございました。

これがまた大好評で、要するに、竹というものがエネルギーになるのかというのが私たち世代にはちょっとびっくりだと思うんです。私、小学校4年まで自宅は五右衛門風呂で、台所ではくど、かまどでご飯炊いたり煮炊きしているという環境で育ってました。「おい、宗夫、ちょっとお風呂たいといて」とか、「くどに火をつけといて。そのかわり竹くべるなよ」とよく言われたんですよ。要するに、一気に温度があつと上がり過ぎるので、くどが割れちゃうとか、エネルギーがハイカロリー過ぎてしまうのでだめだということで、私の頭の中でも、竹をエネルギーにするという、ももとのそういう発想がなかった。

結局、モキ製作所の竹ボイラーと出会ったことによっ

て、「えっ、竹ってバイオマスエネルギーになるんだ」と知った。そうしていろいろ調べてみたら、モキ製作所の製品はボイラーだけでなく、家庭で使う薪ストーブなんかでも竹を燃やしていい。竹が燃やせる薪ストーブ、これは凄いなと。「薪の入手が困難だ困難だと言っているけれども、山ほどあるじゃん」と思いました。見たら竹藪だらけということは、エネルギーがあるということなので、どうせだったらこういうものの普及もしていったらいいよなということになりました。竹筏を始めたおかげで今、天竜舟下り株式会社はモキ製作所の代理店も始めましたので、もし皆さん、このボイラーが欲しくなったら、直接行かずに私のところへ来てください。

ちなみにこれは、私の家で使っている薪ストーブなんです。これは飯田市の市役所で入れてくれたものなのですけれど、地域の行政なども、最近こういうものを地域に浸透させようということで、コミュニティスペースとかに入れてくれるようになっております。

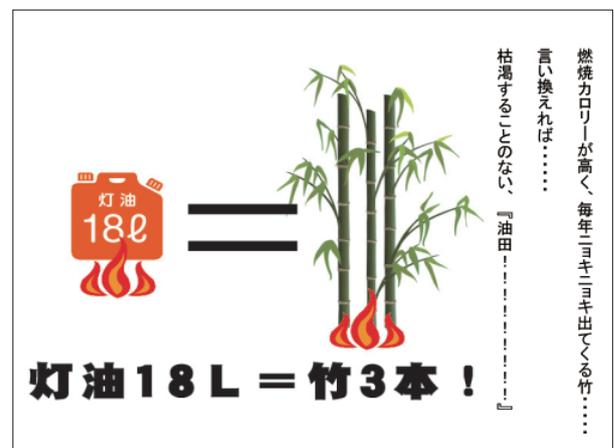
これは竹のエネルギーを数値化したものです。福岡大学のデータを参照したものを、分かりやすく図面にしてみました。こういうことです。大体根元で直径 12 cm ぐらい、やや太めで、長さが 15～16 m の乾燥した竹を 3 本燃やしたものと、灯油 18 リットルを燃やしたものの熱カロリーがほぼイコールなんです。大体 156,000 kcal ぐらいです。だから、竹が 3 本あったら灯油 18 リットルと同じなんですよ。もし竹が燃やせる燃焼機器があるならば、里山に住んでいて、ガソリン使って町中まで行って、ガソリンスタンドで灯油 18 リットル買ってくるんだったら、ひゅっと裏へ行って竹 3 本伐って乾燥させておけば、それが同じことになる。要するに、自分たちのところでエネルギーのサイクルが生まれるということなんじゃないのかなと僕、思っているんですよ。

いろいろ話してきましたけれども、先ほど言ったよう

に、手ノコでぎこぎこ、ぎこぎこやっけていても、しかも船頭数人でやっけていても、やはり広大な放置竹林ではとても歯が立たない。私たちは川を活用していますが、見上げたところには竜丘という場所があるんですよ。この竜丘には当然住民がいらっしゃいます。この方々も、実はゴミの不法投棄に物凄く頭を抱えていたんですよ。だったら、私たちと一緒に活動していったらどうだろうかということで、その市役所の竜丘自治振興センターというところに私、飛び込んでいきました。センター長にこういう話を持って行って、ぜひ一緒にやらないかと言ったら、センター長はめっちゃくっちゃフットワークのいい人で、「おう、やりましょう」ということで、即、天竜川鷲流峡復活プロジェクトが立ち上がりました。

こんな感じで募集をかけたたり、鷲流峡復活プロジェクトの中でも、プロジェクトメンバーだけではなくて、竹林伐採マスターズというのも大々的にスタッフ募集をかけました。今言ったように、こういうことで天竜鷲流峡復活プロジェクトは、地域と企業が一緒になって同じ課題をクリアして、お互いにとってメリットがあるんだよというような展開を作っていきましょうという取組になりました。

ここの地域の方々の凄いところはここだったんですね。竹を伐りましょうって一気に竹を伐り出すかなと思ったら、やはりもともとのお互いの課題がゴミの不法投棄だったわけですよ。竹さえ伐ればゴミが捨てられなくなるのかと。よくネットを張ればゴミが捨てられなくなるとか防犯カメラ付けたらどうとかありますけれども、この方々は凄かったです。地域の方々の意見です。「ガードレール汚ねえわな」「まずガードレール磨かないかん」と言い出した。「うわっ、おもしろい。やりましょう」と言ったんですよ。これは磨いた前と後の写真で、同じ場所ですよ、ガードレール付け替えたわけじゃないんで





もうこの年になって、まさか筏を組んで、天竜川でまた遊べるとは」と. なおかつ飛び込んでしまいました, 興奮してね. この方は 72 かな. しばらくひゅーっと向こうのほうまで泳いでいっちゃったので, スローバッグをばあんと投げて, ロープにつかまってもらって, また手繰り寄せて. すごく感動されていましたね. 「まさかこの年によってトム・ソーヤーみたいなことができるとは思わなかった」と.

これも何というんですかね, 飯田市の職員です, この 2 人. もう完全に顔が子どもになっていますよね. また, これは地主さんたちに乗ってもらった筏です. 「こんなこともやって遊べるんですよ. 地主さんたちも一緒に作業しましょうよ. 遊びましょうよ」ということで. 遊んだ後は, こうやって温まるんですよ. 先ほど言った竹ボイラーで. これがまた気持ちがいい.

これが教育現場にも飛び火して, 地元の小学校で授業をやってくれと, まず長野県の教育委員会から依頼が来ました. 「でも, 伐ったり火をつけたりする教育ですよ. 教育委員会で大丈夫なんですか」と言ったら, 「いや, ぜひやってください」ということで始めました. 一緒になって溪谷の中に入って, こうやって竹を伐るようになりました, 子どもたちに「そんなにたくさんのヘルメットはないから, みんな自転車に乗る時のヘルメットで来てくれ」と言ったら, 60 人の子がみんな色それぞれのヘルメットで来て, 逆に「今, こんなにいろいろな種類のヘルメットがあるんだな」とびっくりしたぐらいです.

この子たちが卒業する時に, サプライズで舟下りをプレゼントしたんですよ. 実際に天竜川で舟下りをしてもらって, 「自分たちできれいにした溪谷の姿を見上げて, それで中学校へ行ってね」とサプライズでプレゼントしたら, 逆サプライズが来ましたね. これは卒業式です. 竜丘小学校の卒業式. 毎年ここで国旗を掲揚されるらし

いですが, この年の子どもたちは, 「お願いだから, 私たちのつくった絵をバックに卒業式をやってほしい. 鶯流峡復活プロジェクトの代表の曾根原さんを来賓で呼んでくれ」と言ったそうなんです. 何のことかなと思って行ったら, 子どもたちがそれぞれの舟に乗って, 「天竜川を進んで中学校へ行きます」という絵を描いたのを掲げてくれていた. これを出したかったらしいんですね. 私もやばかったです. 泣きましたね. 来賓の席にいながら, 1 人でひくひくしてしまして, 「あれ, どうしたんだろう, あのおじさん」というぐらい, 本当に感動しました.

地元の高校との連携もスタートしました. これもまずなかった絵面なんです, 長姫高校という地元の高校の高校生が机とか椅子を自分の学校から全部運んできて, 私たちの弁天港というところに集まって, そこで青空教室をやりたいと言うんですね. どうせやるなら舟の上でも教室をやろうということで, 舟の上でも机と椅子を並べちゃったり, こういう何か妙な連携が始まりました.

これは大学生です. 宮城教育大学の学生さんがわざわざ仙台からやって来て, 朝から溪谷の中に入って竹を伐って, その伐った竹を運び出してきて, 自分たちで組んで, その組んだ筏に乗って, これから下っていくところなんですよ. 下った後は, 戻ってきて, 竹ボイラーでできたお風呂, お湯につかると, そういうもうオール竹三昧のプランです.

きれいな竹林になっても, ゴミはぼんぼん出てきます. greenbird という環境問題の NPO の方々と一緒になって, ゴミを運び出しました. あと倒木もそのままに倒しておいたらゴミだけど, 溪谷の中で薪割りをみんなでやって, それをみんなで運び出して, 薪もエネルギー活用していこうということになった. 温かい作業, しかもおもしろい作業ということですね.



あと、おいしく食べて竹林整備。これも一つの竹林整備です。私たちは溪谷の中で焼き肉をやります。これはイベントでやったんですけれど、網を使わずに竹網バーベキューをやりました。伐ったばかりの竹の横にスリットをチェーンソーでちゃっちゃと入れておいて、割った竹をざっと差し込んでいって、この下の無煙炭化器に炭が入ります。炙っておいて、少しずつ竹の油が出てきたところへ肉とかエビとかを広げて、ある程度食べ終わると、ぼそぼそと竹が落ちてなくなる。でも、タイミングがずれると肉も一緒に落ちちゃう。これは非常にスリリングで、それこそ先ほど聞いたススムさんに言わせると、「こんなものは全然落ち着いて食べやしねえよ」ということでした。ススムさんからは今いちの酷評を頂きましたけれども、私はこれは非常におもしろかったですよ。溪谷の中に網を持っていく必要ないですね。

これは、竹を芯にして作ったパンブークーヘンを焼いている様子です。

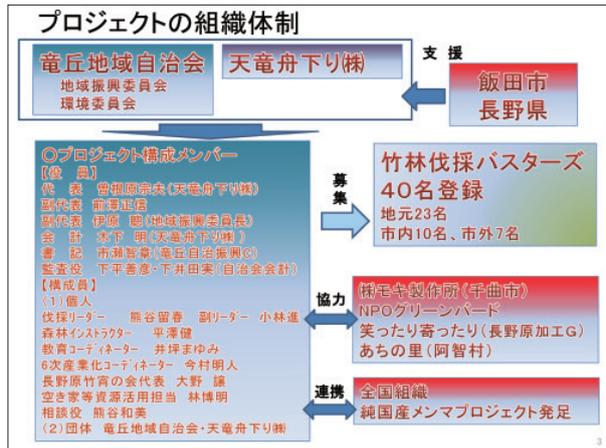
それから、メンマの作り方を学ぼうと考えました。材料になるのは、タケノコの伸びたものです。自分の背丈よりも高いです。これを鎌でさくっと刈って、枝と節を取り除いて、タケノコを湯がくように湯がきます。要す

るに、タケノコだとメンマになる部分がないんだけど、伸びることによってメンマになる部分ができるということなんです。

1年目は企業さんに参加してもらって、企業さんに作って頂きました。翌年はもちろん企業さんにも作ってもらっていますけれど、自分たちの地元の味に作りたいということで、全部自分たちで手作りしました。これは物凄く売上はよかったです。一ヶ月半で売り切れてしまいました。

放置竹林で悩みを抱えている地域は私たちの所だけではなく、幾らでもありますから、この間、全国で純国産メンマプロジェクトを立ち上げました。京都で開かれたキップオフの会には、22都府県から57人の方が集まりました。今年から春先、タケノコがちょっと過ぎたシーズンから、皆さん、いろいろなところの地域の新聞を見ていてください。「おっ、ここでも何とかメンマ、おっ、ここでも何とかメンマ」みたいな形で、どんどん地域の食がこれから同時多発的に生まれているはずですよ。こういう体験はいいですね。

私たちは、飲み屋さんとかお店にも、竹を彫って行灯兼看板にしたものを出しているんですよ。こういう竹



行灯の置いてある店に入っていくと、地元の食べ物が丁寧に紹介されていますよという、一つの新しい意味での商店街展開みたいなのを考えて進めました。そうしたら、横浜反町からもおもしろいから来てくれということで呼ばれて、去年の11月27日だったかな、横浜の反町に行き、イベントで展示を行ってきました。物産ブースも出展して、好評でした。

こういう活動をしていたら、真っ暗だった溪谷が蘇りました。きれいな景色になったと思ったら「サザエさん」が来ちゃったんですね。サザエさんのオープニングで紹介される観光案内で、飯田市の天竜舟下りが紹介されました。これは去年の晩秋の風景です。去年はサザエさんが来てくれなかったんで、ちょっと泣きじじいをレイアウトしてみました。元はゴミの不法投棄でぐちゃぐちゃだったところが、だんだん、だんだん天竜川が見えてきて、今ではヒガンバナが見事に赤い滝のように咲く姿を見せるようになってくれました。要するに、一番最初に見てもらった場所が、こんな感じになったわけですね。竹を伐採してきたら、湯ノ瀬での温泉宿の基礎を初めて見つけました。これは、多分こんな感じで建物が建っていたのかなという想像図です。これからまた、ここまで持っていけたら最高だなと思うんですけども。

そんなことをやっていたら、去年は南信州元気な森林づくり大賞を受賞し、今年は長野県のふるさとの森林づくり賞というのを受賞することができました。こういう形で、今では別に竹を伐るだけではなくて、一緒に遊ぶ人、竹炭をつくったり、竹行灯を彫ったり、料理したり、とにかく「一緒にすかっとしまいか」ということでメンバー募集をしています。プロジェクト組織体制といたら、今では竜丘地域自治会、天竜舟下り株式会社、そこに飯田市や長野県が支援してくれております。竹林伐採バスターズ、あとは企業としてモキ製作所さん、NPO「greenbird」、<sup>に</sup>「笑ったり寄ったり」という農産物加工グループの方、阿智の里さん、ここにまた連携するような形で、全国組織「純国産メンマプロジェクト」が発足しました。こういう形で徐々に徐々にいろいろな枠へと活動が広がっていています。

以上が天竜川鷺流峡復活プロジェクトという私たちの活動の報告です。ちょっとばたばたとしちゃいまして申し訳ございませんでしたが、これにて。ご清聴、どうもありがとうございました。

○司会 曾根原様、ありがとうございました。

## ■意見交換

### 「川辺の『守り』をつなげるために」

○司会 これより、「川辺の『守り』をつなげるために」と題し、意見交換会に入りたいと思います。登壇者の皆様をご紹介致します。先ほどご報告・ご講演頂いた原田様、田中様、曾根原様、そして、新たに石倉水辺愛護会会長の今井忠良様にご登壇頂きます。進行役は、矢作川研究所 洲崎、吉橋です。また、書記をNPOまちの縁側育くみ隊 名畑 恵様をお願いしております。それでは、よろしくお願い致します。

○洲崎 この意見交換では、これまで川辺の環境や景観を守ってこられた水辺愛護団体の活動が今後も継続・発展し、いい川辺づくりにつながっていくようにするにはどうすればいいかということと一緒に考えていきたいと思っています。

また、今回は初めての試みなのですけれど、名畑さんに、グラフィック・ファシリテーションという手法で話し合いをリアルタイムでこちらに記録し、見える化して頂きます。既に今までのお話をメモにまとめて頂いたものがここに展示されています。名畑さん、よろしく願います。

この意見交換にはご報告頂いた原田さん、田中さん、曾根原さんに加えて、活動歴の長い水辺愛護会を代表して、石倉水辺公園愛護会の会長 今井さんにご登壇頂いています。今井さん、石倉水辺公園愛護会のご紹介をまずよろしく願います。

○今井 どうも失礼します。石倉水辺公園愛護会の会長をやっております今井といいます。よろしく願致します。

石倉水辺公園愛護会は、平戸橋から豊田方面に向かって4～500mくらいのところで活動しております。面積が9,000㎡ということになります。愛護会の結成が平成10年、今の会員が12名ということで活動しております。活動日は月2回ということで、第2・第4日曜日、朝8時からやっております。

活動は、スライドにも書いてありますように、<sup>はいわ</sup>波岩水辺公園の愛護会と一緒にいつもやっております。人数的に少ないということで、合計25名なのですが、ちょいちょい欠席の方もみえますので、一応一緒にやっております。

石倉という名前は、ここに書いてありますように、活

動地の中にある護岸用の石垣の名前にちなんでいます。

これが活動状況で、対岸が古巣水辺公園になります。この辺は、昔はもう竹がいっぱいあったところで、今は草刈りだけということで、草刈りできれいにして、夏になるとキャンプの方がいっぱいお見えになります。

これは青木小学校の子どもたちで、活動地に小川がありまして、そこで魚捕りをやるということで、水辺愛護会の会員が見守りを行っております。結構いろいろな魚が捕れて、私たちも非常に勉強になりました。

我々は地域のみんが集まれるような場所をこれからも守っていきたくて思っておりますけれど、結構夏場に使われる事が多くて、テントを張ったりバーベキューをやる人が多いということで、夏場が大繁盛というのがこの現状でございます。以上、ご紹介させていただきました。

**○洲崎** この石倉水辺公園愛護会は、20年という非常に長い期間活動を続けてこられて、本当に凄いなと思っています。なぜ20年間も続いてきたのか、この意見交換の中で伺っていければと思います。

今回は矢作川の水辺愛護活動ということで、特に水辺愛護会にスポットを当ててご紹介をしてきました。まず、曾根原さんと田中さんに、今日の前段の報告、豊田の水辺愛護会についてご感想、ご意見などありましたらお話し頂ければと思います。では、曾根原さんからお願いできるでしょうか。

**○曾根原** まず、竹林に携わって活動されている方の数に驚きましたね。飯田市だったら殆ど全市民じゃないかというくらい。やはり私、日々竹林整備とかやっていると嫌というほど感じる事なんですけれども、マンパワーって物凄く重要なんですよね。1人でやる仕事を2人でやる、3人になる、それは単純に2倍、3倍どころの話ではないんです。1人だと、本当に1人分の仕事がろくに進まない。ただ、人数が増えてくると、その分だけ安全な作業の仕方をきちんと皆さんで共有していないと怪我をしたりというリスクも出てくるわけですから、当然皆さん、そういったところはきちんと講習とかも同時に行われつつやっているのだらうと思うのですけれど、いずれにしても、やはりあれだけのマンパワーが竹林にどっと注ぎ入れることができると、やはり奇跡的な景観の変化というものが生まれるんだよなど、ちょっと私、啞然としながら皆さんの活動報告を見させて頂いたようなところですよ。

**○洲崎** ありがとうございます。では、田中さん、お願いします。

**○田中** では、失礼します。私たちは、ただ竹を伐るという物凄く単純な活動をやってきました。その竹を伐る中で、次はどうするか、そこまでの発想を今回は持たずに矢作川の竹林を伐採しました。天竜川の曾根原さんの話を聞いて、竹林伐採だけではなくて、伐った竹をどういうふうに活用するのか、それが食べ物に変わるという、そういうところまでの発想を今日初めて知ったわけです。

矢作川で伐った竹は20万本というふうに言われていました。実際には、タケノコが出てきて30万近くはあったのではないかなと思います。それを伐って、殆どの竹が処分されたんですけど、その処分をしたのは国土交通省の皆さんです。少し竹を頂いて工作だとかそういうものには活用させて頂きましたけれど、今日いろいろな話を聞いて視野が広がりましたので、また、竹を伐った後の使い道について、これから勉強していきたいと思えます。ありがとうございます。

**○洲崎** それでは今度は、水辺愛護会の会長さんをされている原田さんと今井さんにお聞きします。今日、曾根原さんのご講演、また田中さんの、トヨタの約3,000人というボランティアが参加した社会貢献活動としての竹伐りのお話があったのですけれども、このお二方のお話を聞いての感想やご意見などありましたら、お願いします。

**○原田** 曾根原さんのお話を聞き、あのアイデア、発想の源、あるいはそれをもとにした行動力、これに感心するということですか、驚いてただ聞いておりました。お話の中の「楽しくなくてはならない」、これが大変心に残りました。私たちも活動を続けているわけですけども、何かこう、ただただやっていると、「じゃあ、今日も一日、怪我なく過ごしましょう」「お疲れさんでした。次回よろしく」で終わっちゃっておりゃへんかな、そういうような反省を強くした今日でありました。以上です。

**○洲崎** 有間でも「夢たけのこ」ですとか、タケノコを使ったアイデア料理とかを出されていると思うんですけども、またもっといろいろ広げられるんじゃないかなということをおられたということですね。では、今井さん、お願いします。

○今井 私は、トヨタ自動車さんが例の長興寺の辺りで凄量の竹を伐られたなということで、あそこを通るたびに非常に感心しております。私たちも竹を伐っているのですが、竹の量が非常に多いですね。私たちは河川課をお願いして処理をして頂いているのですが、長興寺の竹も凄く、どういう処理をされたか知りませんが、すっかり運ばれて、きれいな川になったなということで、あそこを通るたびに、見晴らしがよくて、いい川になって、もう名古屋やあちらのほうに負けないくらい立派なまちになってきたなということで、非常に喜んでおります。そういうことを今日は聞きました。どうも失礼します。

○洲崎 田中さん、今度立ち上がるNPOの森林キーパーズについて、少しご紹介頂けるでしょうか。

○田中 まだ内緒のことで、あまり大きな声で言えないのですが、すみません、私事で恐縮ですが、今年の3月でトヨタ自動車を退社します。その関係で、矢作川に携わってみて、これで2年になるのですが、実は、私が退社しますと、その後、私の後継者がいません。矢作川との関わりについては、これからも継続していきたいという思いがありまして、木曜日に市民活動センターにNPOの申請をさせて頂きました。まだメンバーというのは6名くらいしかいません。この少ないメンバーでスタートします。矢作川での活動として、先ほど少しご説明しましたが、高橋から川端公園まで、今度はタケノコを伐ります。もともとこの森林キーパーズというのはトヨタ自動車の中で作ったサークルなんですけれど、10年間、豊田市の市有林で間伐をしていたチームなんですね。10年間で1万本ほどの人工林を伐っておりますけれど、この人工林の経験も生かしながら、山と川で活動する、海での活動は田原の工場のほうでやっているのですが、そういうNPOを作ればいろいろな活動に視野が広がっていくという思いがありまして、何となくこの活動を継続するためのNPOをということで、3月1日に設立しました。今、その手続だとか準備だとか、そういうところに向かっている最中でありまして。

○洲崎 まだ本当に生まれたてというところだと思うのですが、可能性としては、例えば、これから森林キーパーズが矢作川の水辺愛護活動とコラボするというような可能性も考えられるのでしょうか。

○田中 当然一緒にやっていきたいと思います。知り合いにも、いつも河川敷を通りながら小原のほうに帰っていく従業員がいるのですが、そういう人とかOBになった人がメインになってこれからやっていくのですが、そういう人たちもぜひということで、2年間、森林計画、矢作川の竹林整備に関わってきましたので、変わらぬ支援活動をやらせて頂ければと思っております。

○洲崎 豊田市のこれからの水辺愛護活動に本当に心強い味方ができたかと嬉しく思っています。

あと、曾根原さん、実は以前に曾根原さんのお話を伺って、竹筏にも乗らせてもらって物凄く楽しかったのですが、メインの話題の一つとして、メンマのお話が今日ちょっと最後、駆け足だったので、よければ少し補足をして頂けないでしょうか。

○曾根原 そうですね。まず、「メンマって竹なの？」と言われることがよくあるんです。タケノコの時期はタケノコで食べますが、タケノコを見送って自分の背丈より伸びてしまうと、「あーあ、もうタケノコの時期過ぎちゃったな。もう食べられねえわな」と言って、それを放っておくと、また放置竹林にあつという間に戻っていくということだったので、実は、タケノコはタケノコで食べればいいのですが、旬のものでから旬で頂くのが一番いいんです。ぎゅーっと自分の背丈よりも伸びちゃったものを諦めるんじゃなく、それを鎌でさくっと刈ります。鎌でさくっと刈った、その刈った感覚がメンマに加工した時の、「さくっ」とかじる食感とほぼ一緒なんですよ。

タケノコのように、一生懸命頭を探して掘って掘り出さなくても、自分の背丈も高いものがもう堂々としてますから。それを鎌で刈った時に鎌がくっつくかかっちゃうようなのは、噛んだ時に、もう口の中に繊維が残っちゃいます。そうすると、いつまでもぺっぺっとなっちゃう。そうなるでしょうがない、もう伐り倒すしかない。さくっと伐れたものは塩漬けにして、そうですね、一ヶ月から二ヶ月後からは、年間通して食べられるメンマという食への変換がきき、なおかつそれをきちんと商品として販売すれば、整備した竹林がメンマの畑というイメージが変わっていくことができるわけですね。

結局、整備してないと中へ入っていけないので、幾らタケノコが出ても取りにも行けない。放置竹林を伐った後の維持ということをやっとこれから何十年と続けていくというのは嫌だなと思ったんですよ。ただ、維持の

ためだけに伐り続けるのって、だったら、メンマというものにして商品にして販売していけば、その売上というものは携わった人たちにまた戻ってくる。収穫して塩漬けにするということを継続して、それが竹林の維持につながればいいんです。

親竹というのは5年を過ぎたら伐ってしまって、その近くから出てきた威勢のいい竹をまた親竹にして、それ以外のものをまたメンマにして、タケノコを食べて、タケノコのシーズンが過ぎたらメンマに加工してということを繰り返していけば、必然的にそれが維持にもつながっていく。今、日本に流通しているメンマって、ほぼ100%近くが中国産、台湾産の輸入物です。それで、少しでも地産地消をというイメージから、例えば、ラーメン屋さんとかラボして、自分たちの竹林整備から生まれたメンマを、ラーメン屋さんでおいしく食べます、地域の食材を使いますってなっていくと、これまた一つの新しいまちづくりの展開にもつながっていくのではないかなとも思っています。

商品としてのメンマというもの、あと、自分たちの地域の食ですよ、冬場になると白菜漬けたり大根漬けたりするような、そういうイメージの、シーズンを通して食べられる保存食というところ。あと、ラーメン屋さんなどのコラボ、地産地消とか食材にこだわっているラーメン屋も多いですから、そうしたらラーメン屋さんを通じてのアピールもできるというような展開。いろいろな可能性も含めて、それが結局、竹林の整備の維持にも直結している、そういう発想で進めております。

○洲崎 竹の種類は問わないんですよ。

○曾根原 ええ。私はまだモウソウチクでしかやったことないんですけども、実は私に、「このタケノコの伸びたのがメンマになるんですよ」と教えて下さったお師匠さんは、福岡県の糸島市にいらっしゃいます日高さんという方なのですが、その方が、モウソウでもマダケでもハチクでもメンマを作っております。多少の食感の違いは当然あるんですけど。あとは、全部ラーメンのトッピングのメンマとするのではなく、例えば、シュウマイの中に入れたりハンバーグの中に入れたりということによって、一つの食材として捉えていけば、モウソウよりもマダケのほうが少し食感が強いから、さくさくとした食べ物にはマダケのメンマを使いましょうみたいな、それはもうそれぞれ、地域地域のオリジナルで進めていければいいのかなとも思っていますけれどもね。

○洲崎 矢作川の川辺はマダケが多いです。去年の夏に水辺愛護会の先進地視察で、皆さん、曾根原さんのところに伺って、お話を聞いて大変感銘を受けられました。原田さんのところの有間竹林愛護会でもメンマに非常に興味を示されたと聞いていますけれども、少しお話し頂けますか。

○原田 今、お話しのように、10月に水辺愛護会の研修で伺った時に、メンマのお話を聞きまして、地元へ帰って、女性たちの「たけのこ家」さんの皆さんの代表の方にお話をしたら、非常に興味を示されて、「ぜひやってみよう。とにかくやってみよう、成功させて、商品化していきたい」と非常に意欲を持っておられました。「レシピが届くのが少し遅いじゃない」なんていう突き上げもあったわけなんですけれども、そんなことで、私たちも2、3日前及び今日、そのレシピもしっかりしたものを頂きましたので、また持ち帰りまして、相談をし、何とかチャレンジしていきたいなど、こう考えております。

○洲崎 先ほど曾根原さんから、国産メンマのキップオフプロジェクトのご紹介がありまして、22都府県から集まったというふうにおっしゃっていましたが、実はその中に愛知県がまだ入っていないんですね。だから、ひょっとして矢作川ブランドのメンマが愛知県の国産メンマ第1号になったりしたら楽しいなというようなことをちょっと思いました。

それでは、質問票が幾つか届いています。私と吉橋さん宛てのものがちょっと多かったんで、すみません、ここでお答えをしていきたいと思えます。

矢作川や竹林問題に子供たちや一般市民が触れるのに、筏づくりと川下りというのがとても効果的じゃないかという話が凄く納得いった、勉強になりました、矢作川でこういうことができるのかというご質問でした。

覚えていらっしゃる方も多いと思いますけれども、かつて筏下り大会という大イベントが矢作川で5月に行われておりました。20年続いて、毎年千人以上のお客さんが来るようなイベントでした。平戸橋の少し下流の、今日のお話にも出た古嵐水辺公園を出発点に、2kmほど川を下りました。竹ではないんですけど、みんな手作りの筏で下るといって非常に楽しいイベントでした。ですので、届け出をすれば可能ではないか。今日はここに河川管理者の方もいますのでお聞きしてもいいのですけれども、恐らくしかるべき手続を経ればできる。矢作川で誰が音頭を取るのか、そして、矢作川には船頭さんがいな

いので、どういう方にそういう安全面でのケアをしてもらうかということが課題になってくるかと思えます。

あと、もう一点、すみません、これも私たちへの質問なんですけれども、久澄橋の下流左岸の森林塾の活動範囲で竹林の伐採が行われたけれど、護岸の面でも伐採後の養生が必要ではないかというご意見がありました。ちょっとこれは分かりにくかったんですけど、竹林の中に広葉樹が残っているということで、その広葉樹の稚樹が定着し、成長することで、護岸の役割が高められていくのではと思っています。

それから、これも私たち向けで、川は水、農業用水、発電用水、海への栄養源の補給など、さまざまなありがたみというものを豊田市民に与えてくれるんだけど、この水のありがたさというものが知られていないので、そのことが川の愛護活動に関わる人がなかなか少ないという結果になっているのではないかというようご意見を頂きました。

まさしくその通りで、私たちの飲み水も生活に使う水も、工場に車に使う水も、みんな矢作川が元になっている。ふだんの暮らしの中だと、水は水道の蛇口から出てきて排水口に消えていってしまい、その蛇口の向こうには川があり、水源の山があることや、排水口の向こうには三河湾があるということを普段の暮らしで思い描くこととは殆どありません。私たち、矢作川流域の住民は矢作川の水に生かされている、じゃあ、この川にもう少し恩返しをしようということを書いていかななくてはいけない。うちの研究所でももっとそういうことをPRしていかなければいけないのかなと思います。

あと、田中さんに、皆伐した後の場所はその後どうなのか。桜の木でも植えれば、その後もきれいに保たれそうな気がするがというようご質問でした。

○田中 今、国土交通省の方が一生懸命護岸の整備をしてくれていまして、まだ私どももどういうふうになっていくのかというのは聞いてないんですけど、お願いしたのは、長興寺までの1.2 kmと川端公園の先端から1周回ると8 kmくらいになるのではないかなと思うんですけど、そこで市民の方がジョギングやサイクリングをできるようにして頂きたい。竹林がなくなった場所にあれだけの敷地といいますか、土地があるとは思っていませんでしたので、あの場所を公園化して頂ければ、市民の憩いの場になるのではないかなというふうに思っています。

先ほど、このシンポジウムが始まる前に磯谷副市長と

少しお話をさせて頂いた時に、そういう構想を持ってもらえるということも聞きましたので、国土交通省の皆様への河川整備が終わった後、今度、豊田市が手をかけて、あの公園をどういうふうに作り上げていくのかというのを、これから川端公園を整備しながら見届けていきたいというふうに思います。また、2019年のワールドカップが豊田スタジアムで行われる時に、この矢作川の河川敷の、高橋から久澄橋の間にはまだ手つかずの部分もあります。先ほどNPOを立ち上げると言いましたけれども、6人ではできないので、この高橋から久澄橋までの間についても、トヨタ自動車の従業員に参加してもらって、その中継役としてこの森林キーパーズというNPOをつくる、そういう目的でいます。今後も河川敷の整備だけではなくて、どういうふう公園をつくっていかれるのかという事についても、市民の声を聞いて頂いて、いい公園にして頂ければありがたいと思っています。

○洲崎 竹の伐採というのは、実は河畔林づくりのスタート地点ですね。これから草が生え木が生え、放っておけばまた藪になってしまうという中で、これからどういう場所を作るか、また息の長い取り組みをお願いできればと思います。

あと、感想ということで曾根原さんに、「すばらしいご活動に感動しました。ありがとうございます。世界中へ竹との共生をぜひ発信してください」というお言葉がありました。

それでは、あまり時間はないのですが、この意見票にはお書きにならなかったけれども、ぜひここで登壇者の誰かに、これが聞いてみたい、質問でもご意見でも感想でも結構ですので、そういう方がいらっしゃったらご挙手をお願いします。

どうぞ。

○氏名不詳 川に限らず、山なんか竹がいっぱいあって、最終的には、昔、竹っていろいろプラスチック替わりとか、策にしたりいろいろしたと思うんですけど、今の時点で言えば、駆除してしまったほうがいいところもあるような気がするのですが、なかなかそう簡単に、先ほど言われたように、ブルドーザーでがっとなぞぎやればいいのか、山のほうなんてそういうわけにいかないような気もしています。その辺をどうすればいいか、今日の川の関係の方でお答えできるかどうか分かりませんが、竹の駆除とか、死滅させてしまう何かいい方法があるのかどうかというのを少しお伺いし

たいと思います。

○**洲崎** なかなか難しいですね。特に山は、もともとほかの林があったり、民家や田畑などの別な土地利用の場所に侵出しているところが多いので非常に難しい。死滅というのはほぼ無理ではないかと思えますね。やはり、伐採をもう根気よくするしかないということと、伐採したものを、今日のお話のように、何らかの形で利用する。利用と整備をセットにしていくことで、伐採へのモチベーションを持続できる。面積によりますけれども、本当に根気よくやっていたら弱まってしまうので、そういうサイクルができるような竹利用というものを伐採とセットでやっていくしかないのかなと個人的には思います。では、曾根原さん、お願いします。

○**曾根原** 要するに地下茎を弱らせないことには、見えている地上の竹を伐ったところで、どんどんどこどこ出てきちゃうんですけども、伐採する高さによっても地下茎の弱り方というのは違うと言われています。地面すれすれで伐るよりかは、大体人間の腰高くらいで伐っておくと、地下茎は、まだこの竹は生きていてと思って一生懸命養分を送り続ける。よく竹の伐り株から水を吹いていたりして、アオミドロみたいな、カビみたいになっちゃっているような状態になるということがあります。どんどん弱って行って、最終的には次の年にもタケノコは生えてくるのだけれど、比較的細い竹が出てきて、それをまた同じように伐っていれば、3年もすると、もうその系列の地下茎の竹は途絶えるというのも一つあります。

あとは、これはお勧めしませんが、竹の切り株の節を抜いておいて、そこに除草剤をぶっ込んで、ラップとか缶とかで、雨水で除草剤が薄まらないように蓋をしちゃっておく。そうすると、それが逆に地下茎のほうへずっと入って行って、その同じ系列の地下茎がみんな枯れるという、そういうことをやるっていう人の話も聞いたことはあります。そうすると、その辺の土地がその後、例えば畑みたいになった時に、ちょっとどうなのかなんていうのは思いますが、要するに、竹林を絶やしたければ、一番いいのは腰高で伐っていくこと。ただ、3年から5年は頑張らなくていいなと思えますけれども。

○**洲崎** ありがとうございます。では、今のお話に関連しまして。

○**吉橋** すみません。今井会長さん、少しお聞きしたいのですけれど、川辺と山では多分状況は違うかもしれませんが、先ほど写真でお見せ頂いたところは全部竹藪だったところですよ。今は草地になっていますが、どのくらいかかって、どんなふうにしてそうなったのか、ぜひお聞かせください。

○**今井** 今言われたように、やはり3年から4年は辛抱。何回でも草刈り機で頭を伐っていくと、3年から4年できれいになっていきます。そういう経験があります。

○**洲崎** では、ほかに会場からご質問。どうぞ。

○**氏名不詳** 田中さん、どうもご苦労さまです。一つ質問があるんですよ。あれだけの竹をね、2年かかってきれいにして頂いたのは非常にいいことかもしれませんが、私が聞いていてふと思ったことは、あそこに住んでいた動物たちや鳥はどこに行ってしまったのかな。そういうことまでできると恐らく考えて事業をされたと思うんですけども。同じ地球に住んでいて、我々は人間だからその特権がある、でも、動物たちにはそんなのはいぞというふうに思われていると非常によくないのではないかな。そういう心優しいところがあれば、ぜひとも教えてほしいんですけど。

○**田中** 一番心苦しい質問なんですけれど、私どもの社有地にトヨタの森があります。そこでは、市内の小学校の子供たちを毎年153校くらいですけれども呼んで、生涯学習の勉強をする場になっています。その森には、人間が整備して、全ての下草も取ってすっきりさせたところにいる虫と、あるいは動植物も含めてですけれども、もともとの何にも手つかずのところの虫がいます。あるところを整備した時には、その生き物については、自然に自分の棲めるところに移動してくれると聞いています。矢作川については、全て伐採して、そこをブルドーザーで根こそぎ取ってということで、言ってみれば、動植物がかなり、もしかしたら死んだかもしれません。しかし、ブルドーザーでかき出す前には、多分太陽の光がまともに当たるようになって、動物たちは多分どこかに逃げていってくれたと私は思っているんですよ。

ただ、例えば、ヘビが死んでいたとか、鳥が死んでいたとか、そういうものはあそこで計13回活動した時に一度も発見していません。スズメバチの巣もあったのですが、スズメバチも多分どこかに飛んでいって、

新たなところで巣をつくってくれたのかなというふうに私自身思っています。その動物を決して殺したりとか、そういう気持ちでやっているわけではなくて、もともとの状態に戻しつつ、また新たな動物がそこに棲んでくれる、そういう期待も兼ねてやっておりますので、ご理解頂ければと思います。

○洲崎 すみません、少し私から補足をしますと、トヨタの活動地は、もともと東海豪雨災害を受けて、洪水の時に水の流れる量を増やすのに、地面を削って、その上の竹林もろもろ等も全部取っ払う必要があった場所です。その中で、左岸側の御立公園は勾配が緩やかだったので竹林の中の木を残せたのですが、右岸側は急なので、竹林の中の木を殆ど残せなくて、結果、丸裸になってしまった。これからこつこつまた植栽する木を同じ川の別のところから持ってきたりということが計画されており、また、ゆくゆくは河畔林に戻してやることで、時間はかかるけれども、森としての環境を回復させるということを視野に入れています。

ここで名畑さんのほうから、これまでここで出てきたお話の振り返りというものをさせて頂けたらと思います。

○名畑 ありがとうございます。今日はこのような、皆さん、凄い熱量でもって語って頂いたことを少し書きとめていたのですが、とても楽しく書きとめさせてもらいました。

では、今日出たお話を少し振り返らせて頂きます。今日は、「川の新たな恵みを創ろう ～川辺の『守り』をつなげるために～」というお題でしたが、やはり、この川辺の「守り」の継承・発展とこれからに向けてという課題提起が洲崎さんと吉橋さんからありました。

それを受けて、3名の登壇者の方が、まず、有間地区では大きく二つ、「守り」の活動は間伐を、そして、竹の恵みを活用するためには、タケノコの水煮を商品化したりだとか、子供たちとの触れ合いだとか食事会もやっているよということを原田さんが紹介してくれました。

その次に、田中さんには、母なる川・矢作川を見たいということで挑戦、それに共感が寄せられて、その情熱によって3,000人もの人たちが参加したという熱いお話を聞かせて頂きました。

その後、曾根原さんからの話題としては、まさに放置竹林、真っ暗で不法投棄のごみまであったようなところが宝に変わっていった。それは、環境と観光、地域づくりという宝に変わってきたよという非常にダイナミック

なお話を聞かせて頂きました。その物語の始まりは、船頭の有志さんたちが「世界平和」という旗を掲げて筏に乗ったところから始まるという非常にドラマチックな話をして頂きました。

登壇者の方に今井さんが加わって頂いて、今井さん、石倉水辺公園愛護会では20年もの活動を続けてきたというお話を聞かせて頂きました。

そして、お話し合いの中で大きく三つの流れがあったかと思います。まずは、人がたくさん集まるということの強さ、仲間の輪を広げることが語られたかと思っています。加えて、仲間の輪を広げて、それを継続の仕組みづくりへつなげていくということが非常に重要なポイントだと思うのですが、そのうちの一つとして、田中さんは、NPO化をめざして森林キーパーズなど、新しいテーマ型のグループが愛護会と連携するという心強いお話を提案されました。もう一つは、やはり、そうですね、楽しさを仕掛けるということ非常に重要なテーマだったかと思います。曾根原さんに触発されてメンマも作りたいということをお原田さんがおっしゃっていましたが、竹を宝に変えるという発想の凄さが非常に今日はたくさん、目からうろこだったかと思います。

このくらいでよろしいですか。

○洲崎 ありがとうございます。今日の会全体の中身をとても分かりやすく、楽しく視覚化して頂きました。

それでは、そろそろ意見交換の時間も最後に近づいてきてしまいました。曾根原さんから一言ずつ、今日のシンポジウムを振り返って、ご感想などありましたらお話し頂ければと思います。

○曾根原 いろいろなところに出かける機会が多いのですが、やはり意識のある方々がそれぞれの地域で頑張っておられますけれども、必ず聞かれるのが、「この活動も、うちら年をとるとなかなか次への継続が難しいんだ」ということで、これはどこでもよくある話かと思っています。

逆に私は、この整備の継続だったりというものを社会理念で頑張っているわけじゃなくて、おもしろいからやっているだけなんです。おもしろいからやっていたら、どんどん、どんどん、ほかにも可能性が広がっていく。理念も大事なんですけれども、安全性と楽しみというものをいかにして共有していくかということが、結果、若い世代へのバトンタッチになっていくんじゃないかと常々に思っていますので、あまり硬く考えずに、「楽しむためには伐らなきゃ筏は組めないよ」みたいな、そ

ういう順番でもいいのかななんてちらっと思ったりもしたんですけど。これだけたくさん人が集まる場所から、よりいろいろな発想で進めて頂けたらいいかなと思いました。

○洲崎 ありがとうございます。田中さん、お願いします。

○田中 私は幸せなんですけれど、トヨタ自動車という大変大きな会社に勤めている自分を今でも誇りに思うんですけれども、トヨタの持つ財産というのは人的財産だというふうに思います。3年目の人たちが集まってくるということ自体が、いろいろな社内組織があって、そこから200人、300人と矢作川の竹林伐採に賛同してくれるんですけれど、賛同するに当たって、自分としては、情熱を持って、そこに一生懸命自分も取り組み、そういう姿を相手に見せて、また次の機会に、「じゃあ、またやってみよう」というふうに共感をもらえるような、そういう自分をめざしています。

これから矢作川の河川敷での活動で、豊田市と国土交通省の皆さんとトヨタ自動車の皆さん、私がトヨタを去っても、この関係はこれからも継続していきたいと強く願っています。そのことをお願いしながら、これからもいろいろな発想を持てるような仕組みづくりも含めて、トヨタの「カイゼン」という響きは皆さん聞いていますと思いますが、伐り方、景観、残す様子も含めた「川の改善」ということを、この矢作川の河川敷を一つのモデルにしながらやっていきたいというふうに考えています。今後ともご支援・ご協力頂きますよう、よろしくお願い致します。ありがとうございます。

○洲崎 ありがとうございます。では、原田さん、お願いします。

○原田 私たちがしているこの愛護会活動、竹林の伐採等々ですが、どこの愛護会も同じような課題として、後継者不足、高齢化による出役者の減少、後継者がなかなか増えないという大きな問題があると思うわけですが、私たちも、今、それに大変不安を感じております。今後、あと3年間で予定の10年がたつわけですが、そこまで何とか乗り切るには、やはりみんなの会員の方たちと心を通じながら、お互いに協力し合ってやっていくしかないのかなと、こんなことを思っております。

何にしても、「苦しい、えらい」、「まあ、えらいこと

はやめだ」と、そう思うのではなく、「楽しさも、おもしろさもあるんだよ」ということを見つけながら乗り切っていきたいなど、こんなことを考えております。さらには、発表でもお願いしましたボランティアの方の助けを借りながらということもつけ加えておきたいなと思います。以上です。

○洲崎 ありがとうございます。では、今井さん、お願いします。

○今井 今言われたように、私たち、愛護会で竹を伐って、いろいろ活動をしているのですが、結局は、皆さんと仲よく人生を送りたいという気持ちが一番強いのです。それで、これからは川をきれいにすると気持ちがいい、それと、仲間と楽しい話ができるということで、これからは続けていきたいなと思っております。

また、グループで天竜川へ行って、筏下りに何とか乗せて頂きたいという憧れを持ちましたので、またよろしくお願い致します。

○洲崎 ありがとうございます。それでは、最後のまどめに当たり、吉橋さん、お願いします。

○吉橋 愛護会の皆様に話を聞く中で、風景、かつて遊んだ風景を掘り出すんだというふうに聞いてきました。それが活動の原動力になっていると聞いてきたのですが、今日、皆さんのお話を伺いながら、昔の風景の中に、かつて遊んだ仲間や、それから、一緒に魚釣りをしたお父さんたちの面影、そうしたものがあって、そのおもしろさがあった風景を掘り出すんだと、そういう背景があったんだなとつくづく思いました。

そして、今日、たくさん川の恵みのことを聞きました。これからの若い世代も、楽しみを原動力にして新しい風景をつくっていくという、そういうふうな活動の原動力は、やはり昔も今もおもしろいか楽しいということなんだなと思いましたので、そういった楽しさも私たちが何かサポートしていけたらと思います。

○洲崎 私も東京から豊田市に移り住んで、もうすぐ20年になるんですけれども、初めて矢作川を見た時の驚きと感動というのは今も覚えています。この矢作川のきれいを、実は豊田市民が一番知らないんじゃないかなと思います。この美しい川辺をつくるのに、本当に水辺愛護会初め、活動団体の皆さんが凄く大きな役割を果

たしてくださってきています。

今日の会では一応そのことがお伝えできたのかなということも、もっと水辺愛護活動の楽しみが広がって、今まで川に関わったことのなかった人も、この矢作川の水辺の魅力や楽しさ、そういうものを見つけて仲間を増やしていきたい、一緒にやっていきたいと思いますというふうに皆さんに呼びかけをしたいと思います。

それでは、少し時間が超過してしまいましたけれど、これで意見交換会を終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。

登壇者の皆様、そして会場の皆様、熱心にご議論頂きまして、ありがとうございました。

皆様のご退席されます。会場の皆様、もう一度、盛大な拍手をお願い致します。

どうもありがとうございました。

最後に、豊田市建設部副部長 岡本哲志より、閉会のご挨拶を申し上げます。

○岡本 本日は、矢作川研究所シンポジウムにご参加頂きまして、最後までご清聴頂き、誠にありがとうございました。

特にご講演頂きました天竜川鷺流峡復活プロジェクト代表の曾根原様におかれましては、大変興味深い内容を楽しくお話し頂きまして、誠にありがとうございます。ただ、若干残念でございましたのは、動画が見られなかったということで、動画を見られたい方につきましては、ぜひとも現地のほうに行ってお楽しみできたいと思います。

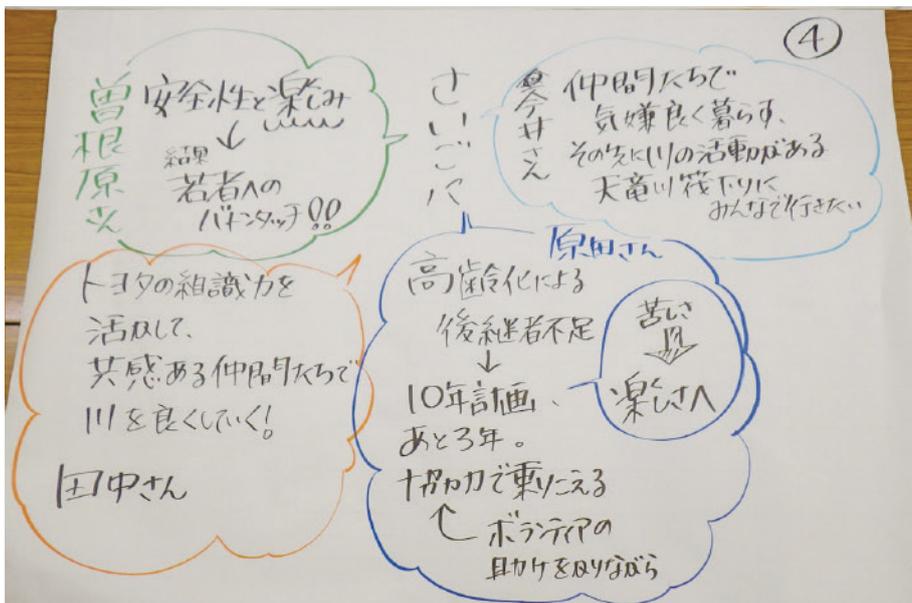
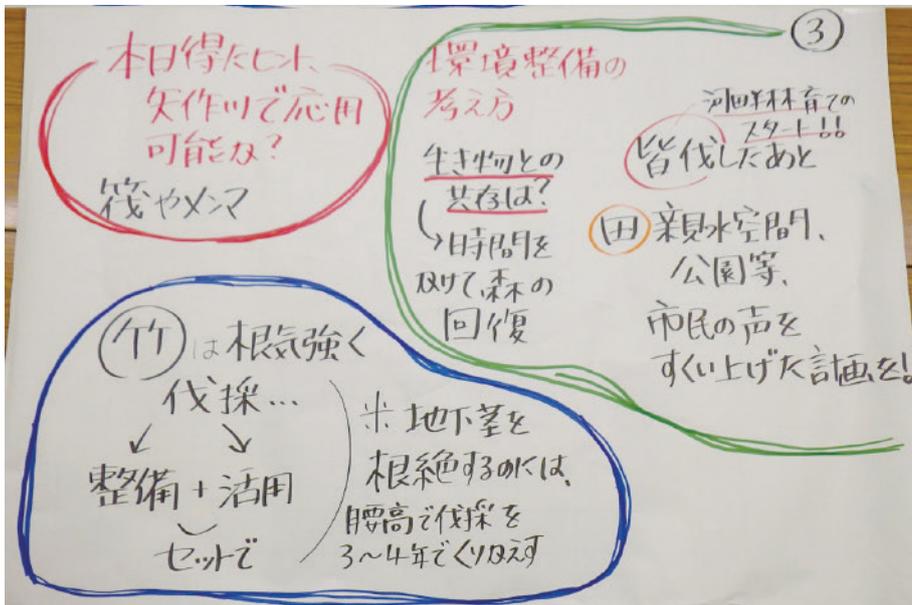
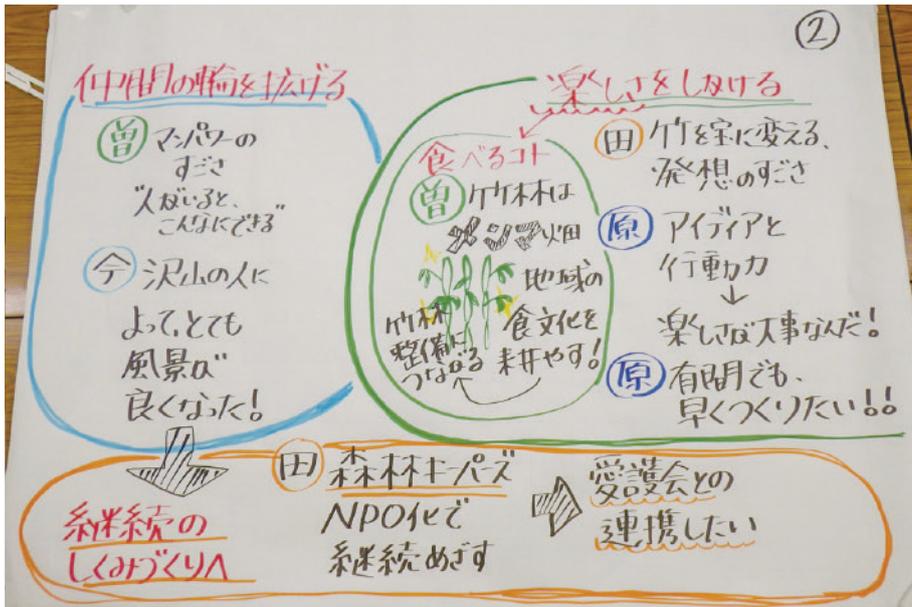
また、市民の皆様方の矢作川への関心が高く、地域での活動を通じまして、人づくり、地域づくりの輪としまして矢作川が大きく利用されていることを痛感致しました。シンポジウムでの貴重なご講演、ご意見を踏まえまして、当研究所といたしましても、矢作川のすばらしい環境の保全に向け調査研究を続け、愛護会活動が継承・発展できますよう支援していきたくと考えております。今後も皆様方のご支援・ご協力をお願い致します。

最後になりましたが、冒頭、副市長からもご案内がありました資料の中に、ラグビーワールドカップ、「星めぐりの町」シネマのチラシ、また、25日のスカイホールにおけます「WE LOVEとよたフェスタ」のご案内等ございますので、ご覧頂ければと思います。

それではこれでシンポジウムを閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。



意見交換で作成されたグラフィック・レコード。



意見交換で作成されたグラフィック・レコード(2).